

2022年度

知をひらく
新入生ブックガイド

にちぶん



こんぱす
羅針盤



沖縄国際大学総合文化学部
日本文化学科

知をひらく新入生ブックガイド にちぶん羅針盤(こんぱす)

二〇二二年度

沖縄国際大学総合文化学部・日本文化学科

「ヤイコシラムスイエ」というアイヌ語がある。
アイヌ語では「考える」ことを
「ヤイ=自ら・コ=に対し・シ=自分の・
ラム=ところ・スイエ=を揺らす」と言う。

大学生の学びとは、なんだろうか？
課題やアルバイト、そして様々なサークル活動。
その様々に変化する時間の中に「自分」というものは、
どのようにあらわれているだろうか？

自分自身で、自分自身の心を揺らすことで、
何が見えてきますか？

2022年度

知 を ひ ら く
新 入 生 フ ッ ク ガ イ ド

にちぶん



こ ん ぱ す
羅 針 盤



沖縄国際大学総合文化学部
日本文化学科

【目 次】

■桃原 千英子 推薦

読む心・書く心—文章の心理学入門—	006
奇跡の教室—エチ先生と『銀の匙』の子どもたち	007
人はいかに学ぶか	008
効果 10 倍の〈学び〉の技法	
—シンプルな方法で学校が変わる！—	009
国語教科書の中の「日本」	010
「私」とは何か	011
日常性批判—シュッツ・ガーフィンケル・フーコー	012
新訳版・思考と言語	013
心の底をのぞいたら	014
本の読み方 スロー・リーディングの実践	015
私とは何か—「個人」から「分人」へ—	016

■山口 真也 推薦

つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み	017
知をひらく図書館の自由を求めて	018
23 分間の奇跡	019
夜明けの図書館 全 7 巻	020
図書館（超）活用術	
100 万回死んだねこ 覚え違いタイトル集	021
税金で買った本	022
ゴールデンランバー	023
図書館の基本を求めて（全 10 巻）	024
パブリック 図書館の奇跡	025
店長がバカすぎて	026
ユーゲニア	027
本と鍵の季節	028
教室に並んだ背表紙	029
お探し物は図書室まで	030
ぼくのミステリな日常	031
ZOOM	032
東京百景	033

■田場 裕規 推薦

萬葉のいのち	034
改訂新版 万葉の旅	035
新版 文学とは何か—現代批評理論への招待	036
定本 酒呑童子の誕生—もうひとつの日本文化	037
きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記	038
萬葉集釋注 一～十	039
ことばを鍛えるイギリスの学校—日本戦没学生の手記	040
一日江戸人	041

朝鮮・琉球航海記 —1816年アマーフト使節団とともに	042
異形の王権	043
現代語訳 論語	044
万葉秀歌 上・下巻	045

■奥山 貴之 推薦

日本人論の危険なあやまち—文化ステレオタイプの誘惑と罠	046
台湾生まれ日本語育ち	047
やさしい日本語 —多文化共生社会へ	048
ことばと思考	049
プロフィシエンシーから見た日本語教育文法	050
「ことば」という幻影 近代日本の言語イデオロギー	051
ミライの授業	052
男がづらいよ 絶望の時代の希望の男性学	053
「昔はよかった」と言うけれど	
戦前のマナー・モラルから考える	054
トランス・サイエンスの時代 科学技術と社会をつなぐ	055

■下地 賀代子 推薦

うちなあぐちへの招待	056
沖縄の方言—調べてみよう暮らしのことば	057
〈国語〉と〈方言〉のあいだ—言語構築の政治学	058
方言は絶滅するの—自分のことばを失った日本人	059
コレモ日本語アルカ? 異人のことばが生まれるとき	060
じゃって方言なおもしとか	061
世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語	062
言語—ことばの研究序説	063
日本語文法・形態論	064
日本語の文法	065
訓読みのはなし—漢字文化圏の中の日本語	066
沖縄 だれにも書かれなくなかった戦後史	067
おんなのことば	068
辞書を編む	069

■安志那 推薦

カルチュラル・スタディーズ	070
日本人の知らない日本語	071
桃太郎は盗人なのか?	072
GO	073
獣たちは故郷をめざす	074
長女たち	075
ウェブ小説の衝撃	076
82年生まれ、キム・ジヨン	077
いのちの初夜	078

■葛綿 正一 推薦

古事記の世界	079
平家物語	080
絵巻を読み解く	081
歌舞伎	082
監督小津安二郎	083
「いき」の構造	084
遠野物語	085
説話の森	086
八犬伝の世界	087
日本近代文学の起源	088
源氏物語のテーマティスム	089

■我部 大和 推薦

原日本・沖縄の民俗と芸能史	090
琉球の時代—大いなる歴史像を求めて—	091
組踊への招待	092
琉舞手帖—初心者から上級者までの琉球舞踊解説	093
那覇女性史(前近代編)なは・女のあしあと	094
琉球・沖縄史の世界	095
琉球の歴史と文化—『おもろさうし』の世界	096
おもろさうし(上・下)	097
古琉球	098
沖縄の歴史と文化	099

■西岡 敏 推薦

新南島風土記	100
沖縄女性史	101
琉球語の美しさ	102
日本語の系統	103
〈古典を読む〉おもろさうし	104
美麗島まで—沖縄、台湾 家族をめぐる物語	105

■村上 陽子 推薦

こころ	106
水滴	107
父と暮せば	108
独り舞	109
カクテル・パーティー	110
超入門!現代文学理論講座	111
ひかりごけ	112
記憶/物語	113
拝啓、本が売れません	114
新装版 苦海浄土 わが水俣病	115
戦争は女の顔をしていない	116
夜の言葉 ファンタジー・SF論	117

■兼本 敏 推薦

漢字の常識・非常識	118
日本地図から歴史を読む方法	119

■名城 邦孝 推薦

本の世界をめぐる冒険	120
図書館のキリギリス	121
図書館 100 連発	122
書物史のために	123
知の広場 図書館と自由	124
この世にたやすい仕事はない	125
ぼくたちは戦場で育った サラエボ 1992-1995	126
サッカーの敵	127

教員エッセイ

夢破れても...	我 部 大 和 ... 128
出会い	桃 原 千英子 ... 130
奈良の生い物 <small>なまもの</small> 一柿食へば一	西 岡 敏 ... 132
歌舞伎案内	葛 綿 正 一 ... 134
虎麻呂くん	田 場 裕 規 ... 136
「電子書籍」は嫌いですか？	山 口 真 也 ... 138
息子2	下 地 賀代子 ... 140
「伝えることは難しい」	奥 山 貴 之 ... 142
大学で文学を学ぶということ	村 上 陽 子 ... 144
とある夢について	安 志 那 ... 146
大学生と読書	名 城 邦 孝 ... 148

学生作品

身近な異文化	古 堅 駆 流 ... 150
「わかった」を経験する	米 須 聖 羅 ... 153
時代を映すフィクションの魅力	仲 本 陽 ... 156
『本と鍵の季節』からみる物事の本質について	名嘉真 里 歩 ... 160
テキストに出現する “い抜き言葉” の変化 ～邦楽の歌詞のヒットソングを対象として～	何 盛 英 恵 ... 163
「あたかも」から考える教材価値	平 識 魁 里 ... 169



— 文章の心理学入門 —

読む心・書く心

● 秋田喜代美 (北大路書房 2002.10)

あ あなたはこれまで、どんなことを感じ、考えながら、文章を読んできただろうか。

読んだ時に感じる心の動きに、目を向けたことはあっただろうか？

文章を書く時はどうだっただろう。

本書は、「読む時、書く時に皆さんの心の中で何が起きているのかをわかってもらうために書かれている」と、筆者は紹介する。

中高生向けの心理学の本で読みやすいが、内容の充実度は高い。

「読むこと」と「書くこと」のしくみを理解し、「読み方上手」「書き方上手」を目指してほしい。

関連授業：リテラシー入門・アカデミック・ライティング・国語科教育法



—エチ先生と『銀の匙』
奇跡の教室
の子どもたち

● 伊藤氏貴 (小学館 2010.12)

ス ロー・リーディングを、学校の授業で実践された、伝説の灘高国語教師と、子どもたちの物語である。

エチ先生の授業は教科書を使わない。中勤助の『銀の匙』という作品を、中学3年間を費やして学んでいく。まさに「遅読」「味読」の授業だ。文学作品を追体験する楽しさの中に、「なんとなくわかったでは済まされない」厳しさがある。楽しい授業を求める教職履修生の皆さんにお薦めの一冊である。

関連授業：国語科教育法



人はいかに学ぶか

● 稲垣佳世子・波多野諠余夫著（中央公論新社 1989.1）

発 達心理学、認知科学の研究者からの、学校変革への提言書である。

学習観の転換により、人の学びの捉え方が大きく変わってきた。

本書は、解説にも記されているように、「伝統的学習観による「人間怠け者」説をくつがえし、「みずから学ぶ存在」としての人を実証的に描き出して」いる。データや図に基づく検証は大学生にとっても理解しやすい内容となっている。

関連授業：国語科教育法



効果10倍の〈学び〉の技法
— シンプルな方法で学校が変わる! —

● 吉田新一郎・岩瀬直樹著 (PHP 研究所 2007.5)

多くの課題を抱える学校現場が変わるには、どうしたらよいのだろうか。

今、教育界に必要とされている、〈学び〉の質を高めるアプローチが紹介されている。

ブッククラブ、チーム学習、異学年の教え合い、評価など、学校や他の職場などにも応用できる実践書である。

ベンジャミン・ブルームの「思考の分類」を用いた教師の質問例は、必見である。

関連授業：国語科教育法



国語教科書の中の「日本」

● 石原千秋 (筑摩書房 2009.9)

国 語科教科書の定番教材をもとに、テキスト分析し、そこに隠されたメッセージを読み解いたものである。

学校の授業では、教師の意図とは別のところで、隠されたメッセージを学習者に与えることがある。そして、そのメタメッセージが、人間形成に影響を及ぼしてしまうことがある。

〈日本〉という枠組みを軸に教科書をテキストとして読んだ時、教室では言葉にはならない何かを教えてはいないかという、問題提起の書である。

関連授業：国語科教育法



「私」とは何か

● 浜田寿美男（講談社 1999.11）

著者は、発達心理学、供述分析の研究者である。

発達論的還元の手法を用いて、「白紙の状態」で生まれ落ちたはずの人間が、ほかの誰でもない「私」となる様を検証した本である。ことばと身体の出会いが「私」の世界を成立させると、ソーシャルやピアジェ、フッサールなどの研究をもとに述べている。

関連授業：国語科教育法



— シュッツ・ガーフィンケル・フーコー —
日常性批判

● 山田富秋 (せりか書房 2000.6)

常 識の解剖学と理解されているエスノメソドロジーを、常識批判として構築しなおす試みの書である。

専門的な用語が多く、難解な印象を受けるが、日常が構成されるメカニズムを社会学的方法から考察することで見えてくる世界がある。社会を多角的に捉えることができる。

関連授業：日本文学特講



新訳版・思考と言語

● ヴィゴツキー著 柴田義松訳 (新読書社 2001.9)

□ シアのヴィゴツキーによる、心理学的研究の名著である。

子どもの思考と言語の発達の問題に関する研究や、内言の研究、生活的概念と科学的概念との比較研究、障害児の研究など、現在の教育界にも大きな貢献を果たしている。

言葉に関心を持つ人、教育に関心を持つ人には必読の書である。

関連授業：日本文学特講 国語科教育法



【難解だと感じた人に】

『ヴィゴツキー入門』

柴田義松 (子どもの未来社 2006.3)

言語、芸術、障害児教育、発達心理学など、あらゆる方面からヴィゴツキーのガイドラインに迫れる「入門書」である。ヴィゴツキーの37年の生涯が刺激的なエピソードとともに綴られている。



心の底をのぞいたら

● なだいなだ (筑摩書房 1992.1)

"nada y nada" (何もなくて、何もない) をペンネームに持つ筆者の、心理学に対する見方を綴った本である。文化人類学の影響を受け、人間の心理を文化との関係から述べた本書は、当時、心理学の正統から外れた新説であった。しかし、現在、21世紀を生きる我々の心を、ものの見事に解き明かしてくれる。

自明とされてきた事に光を当て、一つ一つ「なぜ？」と立ち止まることで、論理的に考える力をつけてくれる一冊である。



本の読み方

スロー・リーディングの実践

● 平野啓一郎 (PHP 研究所 2006.9)

芥 川賞受賞作家による、本の読み方指南書である。「三島由紀夫の再来」と華々しいデビューを飾った作家が、書き手の立場から自分らしい読書の仕方を紹介する。

第1部はスロー・リーディングの基礎編、第2部はテクニック編、第3部は実践編で構成されており、どこから読んでも面白い。特に、第2部の「なぜ」という疑問を持つ」というテクニックを用いると、本は何倍も面白くなる。第3部の実践編では、作家の読みと自分の読みを比較しながら古今の名作を楽しむことができる。



私とは何か
—「個人」から「分人」へ—

● 平野啓一郎 (講談社 2012.9)

関 係の中で変容する自己を、「分人」と称したのが平野である。

「個人」という単位では対応不可能な現代に、「分人」というマイクロな単位を人間の基本単位として導入した、画期的で斬新な一作である。

「分人」という新しい人間観を、社会問題や文学作品、「個人」という概念の歴史などから検証し、導き出した。



つながる図書館

コミュニティの核をめざす試み

● 猪谷千香（筑摩書房 ちくま新書 2014）

図 書館は本を借りるための場所、というイメージを持っている人が多いかもしれませんが、実は「まちづくりの中心」としての役割も期待されるようになってきました。テレビのニュースではおしゃれなコーヒーショップを併設する図書館が取り上げられることもあります。が、「おしゃれな図書館」「デートスポット図書館」は市民の税金で運営されるべきものなのでしょうか。

「課題解決」「ビジネス支援」「まちじゅう図書館」など、いまの図書館のダイナミックな変化がいっぱいあった一冊。司書を目指す学生の必読書です。

関連授業：図書館概論・図書館サービス概論



知をひらく 図書館の自由を求めて

● 西河内靖泰（青灯社 2011）

作 者は公共図書館に長く勤務してきたベテラン司書。ライフワークとして取り組んできた「図書館の自由」をめぐる問題を紹介するとともに、図書館のあるべき姿を提案。取り上げている事例は「船橋市西図書館蔵書廃棄事件」「クロワッサン問題」「原爆と差別事件」「国立国会図書館データ押収事件」「ホームレス問題」などなど。最近の原発問題についても、図書館が何を問われているか、図書館はこれまで反原発資料を集めてこなかったのではないか、という視点から作者独自の問題提起がなされています。

入学前課題で『図書館戦争』を読んだ人にはぜひ目を通してほしい1冊です。現実の図書館でも、「図書館戦争」のようなことが起こっています。司書として、住民の「知る自由」を保障することの大切さと難しさについて深く考えることができます。

関連授業：図書館概論・図書館情報資源概論



23分間の奇跡

● ジェームズ・クラベル著 青島幸男訳 (集英社 集英社文庫 1988)

戦争で負けたある国の、ある小学校の、ある教室に、新しい先生がやってきます。その先生は言葉巧みに、子どもたちから、国家や親、宗教への忠誠を奪っていきます。40ページにも満たない短いお話ですが、子どもたちの心をコントロールすることがいかに簡単か、ということにはとさせられます。物語の登場人物は主に子どもですが、このことは大人にも当然当てはまります。私たちが正しいと思っていることは本当に正しいのでしょうか。人が、誰かから与えられた情報・教育だけでなく、主体的に学び、自分の意見をもつために、図書館が存在します。司書を目指す人にぜひ読んでほしい1冊です。

関連授業：図書館概論 図書館情報資源概論



夜明けの図書館全七巻

● 埜納夕才著（双葉社、2011—2021）

公 共図書館の「レファレンスサービス」をテーマとする珍しいマンガです。新人司書「ひな子」が、利用者が抱えるドラマに寄り添いながら、レファレンス＝調査回答業務を通して、1人1人の問題を解決していく姿がさわやかに描かれています。「本の探偵」とも呼ばれる、レファレンスサービスの魅力を、さまざまなエピソードとからめて紹介しています。

司書の仕事は本を貸すだけではありません。司書を目指す学生にはぜひ手にとってほしいです。

学校図書館のエピソードも面白いです。

関連授業：図書館概論 図書館情報資源概論



覚え違いタイトル集 100万回死んだねこ

● 福井県立図書館 編著 (講談社 2021)

福 井県立図書館では、図書館の利用者から寄せられる「覚え違いタイトル」の実例を集めて、図書館のホームページで公開しています。その中から秀逸な? 「覚え違いタイトル」を1冊にまとめて、「正しい書誌情報」と「司書さんによるレファレンス」を加えた、ちょっとおかしな図書館入門書です。

「とんでもなくクリスタル」「わたしを探さないで」

「下町のロボット」「蚊にピアス」

「おい桐島、お前部活やめるのか?」

あなたは何冊分かりますか?

楽しみながら、図書館司書の検索能力やレファレンスサービスの実際を知ることできます。

(山口 真也)

福 井県立図書館が公式サイトで公開している「覚え違いタイトル集」から厳選した「覚え違い」をまとめた本。タイトルにもあるような利用者のうろ覚えや覚え違いの問い合わせを、司書たちが一生懸命正しい書名を探し出した記録となっている。図書館におけるレファレンスサービスのだいで味を知ることができる本でもあるが、ただただ面白く読める本なのでお勧めです。

(名城 邦孝)

関連科目：図書館概論・情報サービス論



税金で買った本

● 原作 ずいの 漫画 系山岡 (講談社 2021〜2巻まで発売中)

小 学生ぶりに図書館を訪れたヤンキーな石平氏が、図書館で働く個性的なスタッフとの交流を通して図書館の知識を深め、なぜか図書館でアルバイトをするようになる、というお仕事漫画です。

今年の春に「アメトーーク」の「マンガ大好き芸人II」で、麒麟の川島さんが紹介して話題になりました。

図書館のコンセントで充電するとどのくらい得をするのか？

貸した本が臭くなってもどってきたらどうするのか？

図書館学のその他の専門書ではあまり扱わないけれど、実際には問題になっていそうなエピソードが描かれています。

本学図書館でも2Fコミックコーナーでそろえていく予定なので、司書課程で学ぶ皆さんはぜひチェックしてみてください。

関連科目：図書館概論・図書館サービス概論



ゴールデンズランバー

● 伊坂幸太郎 (新潮社・新潮文庫 2010)

衆 人環視の中、首相が爆殺され、なぜか犯人に仕立て上げられる主人公。首相暗殺の濡れ衣を着せられ、様々な人の助けを借りて、必死の逃亡を続けていきます。伊坂幸太郎さんらしい伏線につぐ伏線で、すべてのパズルのピースが組み合わさるようなラストはお見事です。

エンターテインメント作品ですが、「監視社会」の怖さが読み取れる部分があり、図書館学などで教えているプライバシー・個人情報保護の必要性についても考えさせられます。楽しみながら、専門分野を学べる1冊として紹介します。

関連授業：図書館情報技術論



図書館の基本を求めて (全10巻)

岡 山市立図書館に30年勤務し、その後大学教員として司書課程で教えられた田井先生のエッセイ集。「図書館があるから本は売れない!」「指定管理者になったら図書館の利用者は増えた!」といった世の中で流布する図書館批判を、データをもとに次々に論破して行きます。図書館でいま何が問題になっているか、が見えてくる1冊としてもお勧めですし、論理的な思考力を鍛える1冊としても、司書を目指すみなさんにはぜひ読んでほしい1冊です。

● 田井郁久雄 (大学教育出版 2008～2020)



パブリック

図書館の奇跡

● エミリオ・エステベス監督（バップ 2021）

本 ではありませんが、司書を目指す皆さんに見てほしい映画です。

ある寒い冬の日。路上での凍死者が続出、市のシェルターは満杯、行き場がないホームレスの人たちが公共図書館を占拠。警察が排除に動き出す中で、図書館員たちはどのように行動したのか？

図書館とは関わらない目的での利用をどこまで許可するべきなのか、利用者を差別しないとはどのようなことなのか、アメリカでの出来事を描いたフィクションですが、日本の都市部でも起こっている、図書館でのホームレス問題を考えるためのよい材料になります。
関連授業：図書館概論、図書館サービス論



店長がバカすぎて

● 早見和真 (角川春樹事務所 2019)

東 京にある武蔵野書店吉祥寺本店の契約社員である谷原京子が主人公。山本猛という40歳くらいの敏腕ではない店長の下でストレスフルに働く毎日をユーモラスに描いています。2020年の本屋大賞にもノミネートされた一冊です。

同じ「本」を愛する専門的職業として、図書館員と書店員はどう違うのか、を考える材料にもなりますし、本書のテーマとなっている、女性問題をベースとした正規・非正規雇用をめぐるエピソードは図書館現場にも通じる部分があります。

お仕事小説として読むだけでなく、「店長は本当にバカなのか!？」という、かなりどうでもいい謎解きやどんでん返しも含まれた、ミステリー小説としても楽しむことができます。

関連授業：図書館概論 図書館情報資源概論



ユージニア

● 恩田陸 (角川書店 角川文庫 2008)

名 家の大量無差別毒殺事件。犯人は捕まったけど、なぜか釈然としない遺された者たち。見落とされた「真実」を証言する関係者たちの語りをベースに進行する、日本推理作家協会賞受賞の傑作ミステリー。

犯人が分かるようで、分からない。分からないようで、私には分かる(ような気がする)。ミステリー小説としてはある意味では「失格」の1冊なのに、いつまでも心から離れない不思議な作品です。読み終わった後、何度も読み返してしまいます。



本と鍵の季節

● 米澤穂信 (新潮社 2018)

高校の学校図書館が舞台となった連作短編小説のミステリー。高校2年生の男子生徒が図書館や本をめぐる引き起こされる不可解な事件の謎に迫ります。1編1編が独立したお話しになっていますが、随所に伏線がちりばめられていて、最後の最後のページで鳥肌が立つような、不思議な味わいになっています。

「913」「ない本」など、読書好きにはタイトルだけ見てもわくわくしてきます。

「図書館概論」でも学ぶ「図書館の自由に関する宣言」がちょっとだけ出てくるお話しもあって、作者さんがきちんと自由宣言を勉強して書いておられる点もおススメポイントの1つです。読書を楽しみながら勉強もできる、司書課程で学んでいるみなさんにぜひ読んでほしい1冊です。



教室に並んだ背表紙

● 相沢沙呼 (集英社 2020)

2020年は図書館に関する小説がたくさん出版された1年でした。

もともとミステリー小説が好きで、この本の1年前に出た同作者の『medium 霊媒探偵城塚翡翠』が面白かったこともあって、手に取りました。『medium』のような血なまぐさいミステリーとは違って、全体にふんわりした優しいお話ですが、最後にちょっとした謎解きもあって楽しめました。

中学校の図書館を舞台とした連作短編集。読書との出会いを通して成長していく少女たちの物語。

雨の日に、のんびりと疲れをいやしたい人も、おもしろいことはないかと探し回っているような人にも、本の面白さを体験できるぴったりの1冊です。



お探し物は図書室まで

● 青山美智子 (ポプラ社 2020)

こちらも2020年に出版された図書館を舞台にした連作短編集。本屋大賞にもノミネートされました。

「図書室」というタイトルがついていますが、舞台は学校図書館ではなく、悩める人が立ち寄る小さな町の図書館。

「不愛想だけど聞き上手な司書さん」というフレーズがややステレオタイプで気になりつつも、図書館員の仕事がただ本を貸すだけでなく、様々なサービスを通して利用者の人生にも触れる部分がある、ということがイメージできる作品集です。

5作の短編からなる作品集で、登場人物も21歳婦人服販売員、35歳家具メーカー経理部員、40歳元雑誌編集者、30歳ニート、定年退職をした60歳とさまざま。多様な利用者が集う公共図書館の様子をこの本を読んでぜひのぞいてみてください。



ぼくのミステリーな日常

● 若竹七海 (創元推理文庫 1996)

「アメトーク」でカズレーザーさんが絶賛していた、ミステリー作家・若竹七海さんのデビュー作。

密室ものや暗号ものの謎解きだけでなく、怪談、ファンタジー、世間話、ほのぼのした話など、一見するとなんだかまとまりのない短編集ですが、最終章であれよあれよというまに驚愕のミステリーに仕上がります。1996年に発売された短編集ですが、ミステリーの傑作としていまも語り継がれています。騙されたと思ってぜひ読んでみてください。



ZOOM

● イシュトバンバンニヤイ (ブッキング 2005)

これは絵本です。しかも文字は一切なくて、絵だけの絵本です。大学生になぜ絵本をすすめるの?、と思うかもしれませんが、そういう人ほどぜひこの本を手にとってみてください。

大学での学び、そして図書館での読書はみなさんの視野を広げる大切な場面です。この絵本のページを開くと、そこには言葉にできない奇妙な世界が広がります。自分が見えている世界だけが全てではありません。この絵本を読み終える頃には、きっと視野を広げることの大切さ、大学で学ぶことの意味、そして読書の大切さに気づくでしょう。



東京百景

● 又吉直樹 (ヨシモトブックス 2013)

図 書館の予約 20 人待ちを乗り越えて読んだ『火花』は個人的にはいまいちだったのですが、こちらはいいです。エッセイとして発売されたもののようですが、想像力を刺激してくれる、立派な文学。掌編小説集として読んでも十分に読み応えがあります。この作品で何かの賞をとったなら納得だったのに。

同じ又吉さんの、『第 2 図書係補佐』(幻冬舎よしもと文庫)も、「書評」といって、見事な短編集です。

48 歳のおじさんでも、なにか自分でも書いてみようかな、そんな気持ちにさせてくれる作品集です。若いみなさんだからこそ読んでほしいです。



034

万葉のいのち・伊藤博 (はなわ新書 1983.6)

万葉集研究に生涯をささげた著者が、新聞や雑誌等に発表した研究書的な側面も持たせながら、万葉の心、気風、「家」と「旅」、古代人の死生観をつづるエッセイ集である。楽しみながら万葉集に触れさせてくれると思う。



改訂新版 万葉の旅

上・中・下

● 犬養 孝
(平凡社ライブラリー)

2003. 11)

万葉の故地と風土を守るために尽力した著者の不朽の名作。日本各地の万葉の故地を訪ね歩き、その土地の風土と密着した万葉人の詩情を豊富な写真資料や地名解説で解き明かす一書。日本最古の歌集に出てくる故地を巡るための必携である。

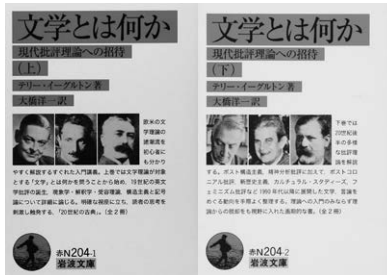


新版 文学とは何か

— 現代批評理論への招待 ● テリー・イーグルトン (岩波書店 1997.2)

料 理をするためには、道具を使いこなさなくてはならない。文学や文化学を志すなら、批評するために道具（理論）をしっかり身に付けなければならない。多少難しいと感じても、頑張って読んでほしい一書。難しければ、『新文学入門』を読んだあとに読むのもよい。難しいことから逃げることなかれ！

※ 2014年、岩波文庫から同書が上下2冊で文庫化された。こちらもおススメする。





—もうひとつの日本文化・高橋昌明（岩波現代文庫 2020.9）

定本 酒呑童子の誕生

酒 呑童子は大江山に棲む鬼のこと。酒呑童子を描く説話は単なる鬼退治の話ではない。日本人に内在する心理を読み解くことができる。天皇や国家の秩序はどのように作られてきたのかを考えていくとき、酒呑童子を通して日本文化の表裏が鮮やかに浮かび上がってくる。異形の童子の正体は何なのだろうか。排除の論理が日本文化の中にどのように息づいてきたのかを知ると、単なる鬼退治の話としては片づけられない。いじめや差別、SNSでの炎上等も、酒呑童子説話などにみる排除の論理に負の源流があるかもしれない。



きけわだつみのこえ

—日本戦没学生の手記

● 日本戦没学生記念会編 (岩波文庫 1992.7)

学 徒動員という言葉を知っているだろうか。太平洋戦争のさ中、全国の学生は、戦争に動員された。優秀な人材が、戦争の波に飲み込まれ、はかなく命をなくしていった。彼らの声は、現代にも響きわたる。平和と自由を謳歌している時代にこそ彼らの声に耳を澄まそうではないか。「愛する者の未来を憂いながら死んでいった学徒兵」の手記を読んでほしい。同世代の若者が、否応なく戦争に巻き込まれ、死の淵から絞り出した声は、皆さんに何をもたらすでしょうか。私は大学1年生の夏に本書に出会いました。



● 伊藤博 (集英社文庫ヘリテージシリーズ 2005.9)

萬葉集釋注 一〇

萬葉集の注釈書である。注釈書と聞くと堅苦しいように思う。しかし、本書は物語萬葉集といってもよい。萬葉集を歌群ごとにまとめて、注釈している。物語を読むように歌それぞれの関係を歌群として取り上げることによって、萬葉集の世界を奥行きのあるものとして浮かび上がらせた。図書館には、単行本もあるが、より手軽な本書を手にとってほしいと思い紹介する。



国が違えば、教育施策も違う。ただ、本書を読むと、日本の国語教育とイギリスとでは、こんなにも違うのかという感想がでる。ナショナルカリキュラムとして、圧倒的な密度で行われるものが、国語教育である。そこで培われるのは、創造性、想像力、論理力が中心になる。日本では、今、アクティブ・ラーニングが注目されている。教育施策は何度も改訂されていくのは、イギリスも同じである。何が違うのか。イギリスを対象化することによって、日本の国語教育がみえてくるだろう。国語教育の目的は、さまざまだが、ことばの教育のよって立つところを改めて考えさせてくれるだろう。

ことばを鍛えるイギリスの学校

— 国語教育で何ができるか — 山本麻子 (岩波現代文庫 2012.12)



江戸の人

● 杉浦日向子 (新潮文庫 2005.3)

漫 画家だった杉浦が江戸風俗評論家を名乗るようになったのは、骨髄移植をしなければならぬ病を患ってからのことだった。漫画家を引退することを「隠居」とうそぶいたのも、杉浦の美学であったか。治療に苦しみながらも「現代の江戸人」として生きること誇りを持ち、江戸の風俗を現代人に優しく語り続けてくれたことが忘れられない。杉浦は、痩せ我慢、見栄っ張り、そして貧乏が江戸人の特徴と捉え、それでも豊かな暮らしが江戸にあったと繰り返し強調している。杉浦が癌で亡くなった時、新聞に掲載された追悼文には、「江戸文化の灯が一瞬で消えた」と書かれていたことが忘れられない。江戸時代を見てきたように話し、あたかも生活していた人のように綴る稀有な作家だった。杉浦漫画の名作は、「合葬」、「百日紅」、「百物語」などがあるが、本書は、その下地となる江戸風俗を杉浦なりの捉え方で紹介している。レッツ・ゴー江戸!!



—1876年アムースト使節団とともに

朝鮮・琉球航海記

● ベイジル・ホール (岩波文庫 1986. 7)

へ。リー来航三十七年前の十九世紀初頭、同行してきたアムースト使節団の中国訪問の期間を利用して、朝鮮・琉球を訪れたイギリス軍艦艦長ベイジル・ホール（日本学者チェンバレンの外祖父）の探検・航海記。イギリス艦隊が初めて会った琉球人は、無名の漁師だった。そして、その漁師がとった行動は、西洋人を感動させた。



異形の王権

● 網野善彦 (平凡社ライブラリー 1993. 6)

網 野史学と呼ばれるほど、センセーショナルな出現だった。従来の歴史観をダイナミックに変えていった名著である。「異形」の人とは、異界の狭間に暮らす「人ならぬ存在」すなわち「聖なる存在」であった。特殊な技能によって社会と関わった彼らは、「異形」と呼ばれ、「人ならぬ者」の象徴と捉えられる。その「異形」を自らの権力基盤として利用したのが後醍醐天皇であった。文学・文化学の隣接諸学からの学びは大きい。



現代語訳 論語

『論語』は、孔子の言行録である。儒教の全経典のなかでも、中核的なテキストと言っても過言ではない。解説書も多く、一見では、その違いはわからないだろう。レベルもいろいろで、内容の正否が問われるようなものまである。東洋史学者の著者は、実証的な研究を徹底したことで知られる。各章句を過不足なく、わかりやすく解説している。われわれの生活には、今でも儒教的な精神が色濃く残っている。私たちの日常にあらわれるものの見方・考え方をとらえ直すことによって、見えてくる世界があるはずである。

● 宮崎市定 (岩波現代文庫 2000.5)



万葉秀歌

上・下巻 ● 斎藤茂吉 (岩波新書 1938年)

万葉集の入門書として、一番手軽で、一番読まれているものだ。2001年に91刷という状況だ。最近はこの書をきっかけとする斎藤茂吉の古典観・文化観が、日本文化を作ったというような発言する研究者も出てきた。思想や文化はひとまず措くとして、歌に親しんで、心を豊かにしてほしい。詩情豊かな人生は、それだけで人間らしい。



巷にあふれる「日本人論」や「日本文化論」。その一つ、「日本人は集団主義的」であり「アメリカ人は個人主義的」だという言葉に、認知科学（認知心理学・社会心理学）を専門とする筆者は真っ向から反論します。事例や個人の思い込みを根拠にしているからというのです。事例を根拠にするというのは、特定の人物の言動、特定の出来事や事件を根拠にするということです。しかし、こうした事例には反対の事例を用意することが可能です。筆者は認知科学の研究から、集団主義的な性質について日本人もアメリカ人も差がない、つまり日本人は集団主義的ではないことを示し、さらに何故「日本人は集団主義的」だという言葉が定着してしまったのかを論じています。そして、こうした文化ステレオタイプに囚われてグループ間の誤解や対立を深刻なものにしてはならないと警鐘を鳴らすのです。私たちは様々な思い込みに囚われていて、それが全くないという人はいないでしょう。全ての人々が「思い込みを持っている」ことを知り、その例を知ることは、多文化間コミュニケーションを考える上でとても重要なことだと思います。

日本人論の危険なあやまち

文化ステレオタイプの誘惑と罠

● 高野陽太郎（ディスカヴァー携書 2019）



台湾生まれ日本語育ち

・ 温又柔 (白水Uブックス 2018)

台 湾で生まれ、3歳から日本で育った筆者が、どのように言語や社会と向き合ってきたかを書いたエッセイです。日本で生まれ、日本で育ち、国籍が日本で、母語が日本語で、両親が日本人で・・・、というわけではない人はたくさん日本で暮らし、日本語を使っています。あまり意識をしたことがないと、これは特別なことに感じられるかもしれませんが、しかし、国境を越えた人の移動が特別ではない以上、特別なことではないのです。では、「特別なことではない」からそれらに関わることがよく知られているのでしょうか。どうもそういうわけではなさそうです。こうした人々が、何に困難を感じたり苦しんだりしているか、そして、何に幸せを感じたり楽しんだりしているか、あまり知られていないのではないのでしょうか。多文化間コミュニケーションや日本語教育に関心がある人には、この本を読んでその一端を知って欲しいと思います。筆者の小説もお勧めです。



— 多文化共生社会へ —

やさしい日本語

● 庵功雄 (岩波新書 2010)

日 本に住む人は一様ではありません。日本語母語話者、非母語話者、様々な背景を持つ人々が日本社会で「共生」していくためのアイデアの一つに、「やさしい日本語」があります。「やさしい日本語」は母語話者が調整を加えた日本語と説明されますが、これを相互に歩みよってコミュニケーションを取るための工夫だと考えると、「やさしい日本語」の考え方や方法は外国人に限らずあらゆる人とのコミュニケーションで有効であることが分かります。本書は様々な人とお互いに「伝えあう」ための具体的な考え方や方法を学ぶ、いい材料になると思います。



ことばと思考

● 今井むつみ (岩波新書 2010)

私 たちは、言葉を通して世界を見、言葉を通して思考しています。この言葉と思考の関係について考えようというのが本書です。「言語が異なると認識が異なる」ということは 20 世紀前半から文化人類学者や言語学者が唱えていたことで、今でも外国語学習の中ではよく言われることです。認知科学、中でも認知心理学・発達心理学・言語心理学を専門とする筆者は、様々な実験からそれを検証していきます。こうして言語と思考の関係について考えることは、自分の言語や思考を相対化して捉えることを促してくれます。言語と思考の関係から、人間の本質に迫ってみましょう。



プロフィシエンシーから見た 日本語教育文法

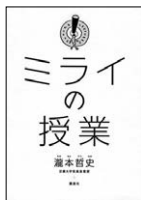
・山内博之（ひつじ書房 2009）

プロフィシエンシーという言葉は、あまり耳慣れないものかもしれません。これは、運用能力、実践力という意味の言葉です。言語教育において（単語や文法を覚えているかどうかではなく）その言語を用いて何ができるかを問う考え方です。本書は、言語活動と文法の間を整理し、示しています。そして、実際にどのような日本語教育の授業を行うのかという示唆も与えてくれます。この観点を軸に、自分が受けてきた外国語教育を振り返ってみたり、日本語教育を含む外国語学習用のテキストを分析してみたりしてはどうでしょうか。



近代日本の言語イデオロギー
「ことば」という幻影
●イ・ヨンスク (明石書店 2009)

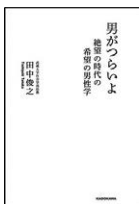
近代の日本がどのような思想で「国語政策」を行ってきたか、そして、今後どのような方向に向かっていくべきかを論じたのが本書です。「国語」と「日本語」の関係、「標準語」と「方言」の関係、そしてそこに絡む言語政策について考えていくことができます。グローバル化が進む中で、言語が平等であるためにはどうすればいいのでしょうか。難題ですが、様々な背景を知り考えていって欲しいと思います。イ・ヨンスク『「国語」という思想』(岩波書店、1996年)も合わせて読んでみてください。



ミライの授業

● 瀧本哲史（講談社 2016）

予 測が難しい「ミライ」に備えるために、何ができるのか。そうしたことを考えていく本書は、大学生よりは少し若い人を対象に書かれたものですが、大学生が読んでも、さらに上の世代の人が読んでも意味のあるものです。「なぜ学ぶのか」という問いに一定の答えを持つ人も、あまり持たない人も、その問いに対する一つの考え方を知ることができます。もちろん、「一つの考え方」という保留は必要です。そこから自分なりに「ミライ」に向けて、どう学び、どう生きていくのかを考えてみてください。そして、自分より下の世代の人たち（「ミライ」の人たち）に何かを伝えられる人になって欲しいと思います。



男がつらいよ

絶望の時代の希望の男性学

● 田中俊之 (KADOKAWA 2015)

本書は、ジェンダーについて「男性」に焦点をあてた「男性学」の入門書となっています。「女性学」も「男性学」も、ジェンダーの問題に取り組んでいるということは同じで、「女／男らしさ」や「女／男のくせに」という縛りからの解放を目指しています。筆者は、社会が変化しその中で人々がジェンダーの枠の中に立ち続けることが難しくなっていることを指摘しつつ、男性の抱える「生きづらさ」について論じていきます。あらゆる人が「生きづらさ」から解放されて自分らしく生きていくためにはどうすればいいのか、考えていく端緒にしてみられればと思います。



戦前のマナー・モラルから考える
「昔はよかった」と言うけれど
 ● 大倉幸宏（新評論 2013）

若い人は、何かと「近頃の若い者は…」
 と言われるですね。「昔はよかった」
 もワンセットかもしれません。でも、本当に
 「近頃の若い者」に問題が多く、「昔はよかつ
 た」のでしょうか。一般論や思い込みに囚わ
 れず、データをもとに考えてみようというの
 が本書の目的です。もちろん、今のいい部分
 はいい、よくない部分はよくない。昔にもそ
 れは当てはまります。先入観にとらわれずエ
 ビデンス（証拠）を基に考える、様々なこと
 を相対化して捉える、そんなことの大切さを
 この本は伝えてくれます。そこから、現在起
 きている問題について考えるヒントも得られ
 るはずです。



トランス・サイエンスの時代

科学技術と社会をつなぐ

小林傳司 (NTT出版 2007)

文 系の学生にとって、科学技術について考えることは縁遠いことかもしれませんが、でも、それでは社会的な意思決定において問題が出てくるというのが著者の考えです。ある現象について、そのメカニズムを科学的に説明することは「科学」はできます。しかし、科学に関することで一定のリスクを伴う判断をしなければいけない時、どうすればいいのかは「科学」は答えられません。例えば、筆者は「狂牛病」「遺伝子組み換え食品」「原子力発電所」などの問題を取り上げ、社会的な意思決定の中で「科学」が答えを出せないことを示します。「科学」はリスクの程度は言えますが、そのリスクを抱えるかどうかは社会の成員全員で考えなければならない問題だからです。こうした問題を「トランスサイエンス」、つまり「科学を超えた」問題として筆者は提示します。科学と社会がどう繋がっていくのかを考える本書は、理系文系を問わず読んで欲しいものです。



うちなあぐちへの招待

● 野原三義 (沖縄タイムス社 2005)

2004年3月に日本文化学科(当時は国語国文学科)を退職された、野原三義先生の著作集です。1970年代から2000年代にかけて書かれた原稿の中で、「読みやすそうなもの」が選ばれています。「うちなあぐち入門」を始め、「沖縄と奄美の方言」「宜野湾方言」など沖縄本島の方言についての論文の他、日本文化学科の講義で行った調査を元に、若者言葉について記した論考も含まれています。この1冊を読むだけで、沖縄方言の基礎知識はばっちり身についちゃうでしょう！また、なんだか難しそうな、手に取るのがためらわれてしまうような大著の内容を紹介しているページもあって(「うちなあぐちの本」)、もっと深く勉強したいというときの参考になります。



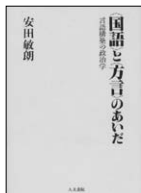
沖縄の方言

調べてみよう暮らしのことば

● 井上史雄（監修）（ゆまに書房 2004）

奄 美、沖縄、宮古、八重山各地の日常会話の中でよく使われている方言が「暮らしのことば」として紹介されています。各地のユニークなことば、若い世代で使われる新しい方言、形は同じなのに地域で意味が違っていることばなど、さまざまな視点から「方言」の現在が学べます。小学生、中学生ぐらいを対象としていて、易しい文章で書かれていて読みやすいのに、内容はけっこう専門的。琉球方言のことを全然知らないんだけどちょっと勉強してみたいという人にぴったりの入門書です。

（実は、日本文化学科の西岡敏先生も執筆者のお一人なんですよ！）



—言語構築の政治学—

● 安田敏朗 (人文書院 1999)

〈国語〉と〈方言〉のあいだ

言 語としての「方言」そのものについてではなく、「日本」という国の歴史の変遷の中で、「方言」がどのように捉えられ、語られてきたかを論じている本です。「方言」は、近代化による国家設立の過程から、帝国期、戦後、そして現代の国際化という、社会的に大きな変化の生じた時期に、注目され、その当時の社会的状況を背景にさまざまに語られています。単なる「標準語」選定のための参考資料だったものが、恥ずべき矯正の対象となり、不要とされ、そして時代を経て今、守るべき価値あるものとなっている。その意味するところとは？

ちょっと分厚いです。近現代史の知識もちょっと(?) 必要です。それでも頑張って読むに値する本だと思います。国語の先生、日本語の先生になりたい人に特にお勧めです。



— 方言は絶滅するのか
 — 自分のことばを失った日本人
 ・ 真田信治 (PHP 新書 2001)

な かなか衝撃的なタイトルのこの本。ですが、危機的な状況にある方言の現状を憂いているわけではありません。著者は、消えていくことばと、そのなかで新しく生まれてくることばが、いかにして消え、いかにして生まれてくるのかを見つめています。沖縄、北陸、韓国、ミクロネシアなど幅広い地域をフィールドに、その土地の言葉が、日本語共通語の影響をただそのまま受け入れているのではないことを示します。そして、方言が、「フィルターによってことばを濾過するという、時間をかけた置換過程」を経て、変わっていくものであると述べるのです。大切なのは、それが「自分のことば」かどうかということ。著書の最後の1文を紹介します。「借り物のことばでは表現できない文化を自分たちで持てるかどうかがいま問われているのである。」



コレモ日本語アルカ？

異人のことばが生まれるとき ● 金水敏 (岩波書店 2014)

「これながいきの薬ある。のむよろしい。」この台詞を話している人は？と尋ねられたら、「中国人」と答える人は少なくないと思います。でも、実際の中国の人はこんな日本語の話し方はしていませんよね。なぜ、私たちはそのように感じてしまうのか。

筆者は「役割語」研究の第一人者です。「役割語」とは特定の話し方と人物像とが強く結びつけられ、かつその結びつき＝連想が社会的に共有されているときの、その話し方のことを指します。この「役割語」の観点から、先の<アルヨことば>のルーツと歴史的形成について、中国における言語実態も踏まえつつ探求・考察しようとしています。興味を持った人は同著者による『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（2003 岩波書店）も合わせて読んで見て下さい。



じゃって方言なおもしろか

● 木部暢子 (岩波書店 2013)

本のタイトルとなっているのは「だから方言はおもしろい」という意味の鹿児島方言です。鹿児島をはじめとする九州各地、また奄美大島や与那国島など琉球の諸地域で行った20年以上にわたるフィールド調査の成果に基づき、イントネーションや親族を表す言葉、「さかさまことば」(具体的な内容は読んで確かめて下さいね)、1人称複数形など、多岐にわたる話題を紹介しています。また第5章では、「方言の将来」として多くの言語(方言)がさらされている「消滅危機」の問題にも言及しています。(ここでは言葉に興味のある人みんなに読んでもらいたいところです。)

地域の言葉には「共通語」には見られないさまざまな現象が盛りだくさんです。「アンシースマフツェーウムツシムン」(「だから方言はおもしろい」宮古多良間方言)。「共通語」だけが「日本語」だと思ふことなかれ。ちなみに、著者である木部先生は私の元上司で、今でも大変お世話になっている大先生です。



世界の言語と日本語

—言語類型論から見た日本語

● 角田 太作 (くろしお出版 2009)

ま ず帯の言葉に注目です。「日本語は特殊な言語ではない」。この本の内容は「言語類型論の観点から見た日本語」というものです。類型論とはさまざまな言語を比べて類似点、相違点を探り、最後に、すべての言語にあてはまる普遍的な要素を見つけようとする言語学の一分野です。著者は、日本語を世界の諸言語と比較して、似ている点、異なる点を明らかにし、日本語を幅広い視野から眺めています。そして、帯に書かれている結論に至っているわけです。また、日本では英語偏重の傾向が強いため英語を言語の基準においてしまう人が多いと言われるのですが、そんな迷信(?)も、ずばっと一刀両断にされています(第9章「日本語は特殊な言語ではない、しかし、英語は特殊な言語だ」)。少し難しい本ですが、頑張って読んでみてください。初版は1991年、2009年に改訂版がでています。



言語

—ことばの研究序説

● エドワード・サピア (岩波文庫 1998)

アメリカの言語学者・人類学者エドワード・サピア (1884-1939) による言語学概論です。「天才的」と形容されるサピアのこの本は、第1章の「言語の定義」から第11章の「言語と文学」まで、とても幅広く、かつ深淵な内容を含んでいます。でも、文章は軟らかく、詩的な印象を受けるところもあり、他の一般言語学の概説書よりも読みやすいです。目次を見て、興味のあるところから読み始めてみて下さい。原本は1921年に出版され、今回紹介している岩波文庫版を含め、3冊の翻訳本がでています。(木坂千秋訳、1943年(刀江出版)、泉井久之助訳、1957年(紀伊國屋書店)) 90年たった今なお、得るところの多い価値ある本です。ちなみに、手に入りにくい先の2冊の初版本を持っているというのが私の秘かな自慢です。



日本語文法・形態論

● 鈴木重幸 (むぎ書房 1978)

この本のなかで解説されている文法論は、小学校や中学校で学ぶ、いわゆる「学校文法」とは全く異なっています。著者は、「これまでの中学・高校でおこなわれてきた文法—学校文法—の知識は、子どもたちのよみかきの力をつけるためにはほとんど役にたたない」と、学校文法を批判する立場をとっています。そして、「国語教育のなかで文法指導を実践するため」の文法論の改革を目指しています。この本は、ある私立の小学校で実際に使われた国語のオリジナル教科書を解説したもので、スラスラ読めるという性格のものではありません。ですが、じっくりと読んでいくことで、形態論という学問分野の基礎を身につけることができます。文法に興味がある人はぜひ手にとってみて下さい。



日本語の文法

● 高橋太郎他 (ひつじ書房 2005)

先 に紹介した『日本語文法・形態論』と同じく、学校文法とは異なる文法理論にもとづく教科書です。単行本としての出版は2005年ですが、そのもととなっている教材は1980年代に作られました。それから毎年改訂が加えられ、やがて私家版として大学の文法の授業でも使われるようになり、中国や韓国では翻訳も出版され、まさに満を持して、日本でも出版された本です。目次が細かく、索引もついているので、わからないことがあったときにさっと調べるための日本語の文法書としても優秀です。まず簡潔な説明があって、そのあとに細かい内容に進むという構成で、項目毎に問題もついています。(解答がついていないのが残念ですが。) 言語の1つとして「日本語」を捉え、そのしくみを学ぼうとするのに最適な1冊です。



漢字文化圏の中の日本語

訓読みのはなし

● 菅原宏之 (光文社新書 2008)

日 本語にはひらがなとカタカナと漢字があつて（厳密にはもっとあるけど、省略）、その漢字には訓読みと音読みがあります。中国語に由来し、一応のパターンをもつ音読みに対し、「色々ある」と言うほかない訓読み。そんな訓読みにはたくさんの‘不思議’があります。そんな訓読みの不思議に、豊富な用例をもって答えてくれる本です。訓読みの歴史とその仕組みをはじめ、多彩な訓読みの個々の用例の考察、正書法の問題、新しい用例として最近の歌謡曲の歌詞や名前などにも触れています。また「東アジア世界の訓読み」として、中国、台湾、朝鮮・韓国、ベトナムにおける「訓読み」事情も紹介されていて、思わず「へーっ」とつぶやいてしまいます。とにかく面白い本です。



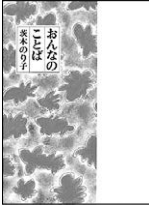
沖縄 ただれにも書かれたく なかつた戦後史

● 佐野眞一（集英社インターナショナル 2008）

沖 縄に生きる人みんなに読んでほしい本です。南国の楽園、豊かな伝統芸能、最近王朝口マン溢れる歴史的な島など、「沖縄」はさまざまな側面から語られてきていますが、戦後の生々しい、陰と闇の部分はあまり知られていないと言えます。著者は、沖縄の戦前戦後史を賑わしたさまざまな人物にスポットライトをあて、その姿を描くことにより、「沖縄列島を一個の肉体と見立て、その肉体が戦後に演じ、あるいは演じさせられた悲劇と喜劇、まばゆい光と濃厚な影があやなす南島奇譚ともいうべきドキュメント」を作り上げています。どこを読んでも強烈で、衝撃的な内容です。

表紙も良いです。女の子の眼差しがとても印象的で、心にくるものがあります。飾っておきたくなるほどかっこいい、という意味でもお気に入りの本です。

2011年には待望の文庫版も刊行されました。（上下巻、集英社文庫）



おんなのこゝば

・茨木のり子 (童話屋 1994)

童 話屋の担当者が「茨木さんのお許しを
 いただいて」編んだという「詞華集(ア
 ソロジー)」です。国語の教科書にも掲載
 された「わたしが一番きれいだったとき」を
 はじめ、筆者の代表的な詩集六冊より三五編
 がおさめられています。手の広サイズの、装
 丁のとてもきれいな本です。
 繊細で力強く、きびしくてやさしく、明るく
 て影をもつ。いろいろな言葉を並べて語って
 みても上手に言い表せている気がなくて、
 そんな自分に腹が立つほど一つ一つの詩が心
 に響きます。

だから代わりに好きな詩の一節を。

まきこまれ
 ふりまわされ
 くたびれはてて

ある日 卒然と悟らされる
 もしかしたら たぶんそう
 沢山のやさしい手が添えられたのだ

一人で処理してきたと思っている
 わたくしの幾つかの結節点にも
 今日までそれと気づかせぬほどの
 さりげなさで

(「知名」より)



辞書を編む

● 飯間浩明（光文社新書 光文社 2013）

本書は、『三省堂国語辞典』の編纂に携わる著者が、「私自身の仕事について思う存分語りたい」という欲求から生まれたものです。国語辞典の編纂という仕事は「地味で、目立たず、さほど関心を引かない」けれど「スリルと発見に満ち、ものを生み出す喜び」がある。それを多くの人に分かってもらいたいという野心（？）に溢れています。用例採集のためには、新聞や雑誌、書籍、パンフレットはもとよりツイッターやメールなどのweb情報、果てはテレビやラジオ、CD、動画サイトなどの音声情報にまで目を配らなければなりません。そうして集めたことばたちを取捨選択しなければなりません。そして、辞書に載せることばたちに語釈をつけて、すでに載っていることばの「手入れ」もして、できあがった原稿を何回も何回も校正して……。何とも気の遠くなる作業の連続ですが、筆者の語り口は軽く、具体例も面白く、辞典への「愛」に溢れています。

本書タイトルの基となっているのはもちろん三浦しをんの『舟を編む』。帯文まで書いて貰っています。



カルチュラル・スタディーズ

● 吉見俊哉 (岩波書店

2000)

本書は、文化研究に関する代表的な入門書です。文化の定義は実にさまざまで、文化について考えていると迷子になってしまいがちです。映画、漫画、音楽、絵画、舞踊などは現実において確かに存在しているのに、なぜその概念はこんなにも難解でしょうか。文化は実際どのようなものなのか、自分が考える文化は何なのかという問いに答えてくれる本です。



日本人の知らない日本語

● 蛇蔵&海野凧子 (KADOKAWA 2009)

日 本語学校を舞台に日本語教師と外国人学生たちの面白いエピソードを通して、言語を学ぶということは文化を学ぶこと、また互いの文化を理解し合うことということを気付かせてくれる本です。特に日本語教育や異文化コミュニケーションに興味がある人におすすめします。



桃太郎は盗人なのか？

● 倉持よつば (新日本出版社 2019)

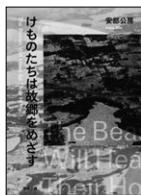
小 学校5年生の著者は、「鬼だから殺してもいい？あなたはごどう思いますか？」と書かれた桃太郎の絵本を読み、桃太郎盗人説の真偽を確かめようと決心しました。彼女は全国の桃太郎話を読み比べ、時代の変化による物語の変容に着目し、江戸時代にまで遡ります。疑問を持ち、自ら調べ、研究を進める方法が分かります。文化研究に関心がある人や卒業論文に漠然とした不安を持っている人におすすめです。



GO

● 金城一紀 (角川文庫 2007)

現代日本において「在日コリアン」として生きるというのは、果たしてどのような「体験」でしょうか。この小説では一人の少年が恋愛をきっかけに、自分を軸にして複雑に絡み合っている国籍、民族、アイデンティティなど重いテーマをさらりと見つめ直します。彼の青春時代の試行錯誤を見守りながら、「在日コリアン」に対するヘイトスピーチの問題も一緒に考えてみましょう。



けものたちは故郷をめざす

● 安部公房（新潮文庫 1970）

1 1945年8月、旧「満州」（中国東北地方）には多くの日本人が取り残されていました。この小説は、その一人である日本人少年がソ連軍の監視の目を盗み、被支配民族の憎悪を肌で感じつつ荒野を彷徨い、「故郷」へと向かう姿を描いています。国民国家というシステムの外に放り出された人々は獣となり、何処へ向かうのか。今の私たちにとっては空気のように当たり前であるものについて、考えてみましょう。



長女たち

● 篠田節子(新潮文庫 2017)

現 在日本は「人生 100 年時代」を迎えつつあり、その中でも沖縄県は長寿県として有名です。しかし、日本社会は「人生 100 年時代」を迎える準備ができているのでしょうか。また、離婚率・非婚率・生涯未婚率も年々伸びる中、高齢者の介護はどうなるのでしょうか。この小説では親の介護を担った長女たちの苦悩を通して、高齢化問題を浮かび上がらせます。少しサスペンスも入っているので、自分の老後を想像しながら読んでいくと背筋が涼しくなってくるかも知れません。



ウェブ小説の衝撃

インターネットとスマートフォンの普及によって全世界で読まれているウェブ小説は、今では莫大な利益を生む文化産業でもあります。紙媒体を好むと知られている日本において、ウェブ小説はどのように受け入れられ、変化しているのか。刊行から時間が経って現在の状況とは少々隔たりを感じるところもありますが、ウェブ小説やメディアに興味がある人には一読を勧めます。

● 飯田一史 (筑摩書房 2016)



82年生まれ、キム・ジヨン・

チヨ・ナムジュ (筑摩書房 2018)

「キム（金）」は韓国で最も多い苗字で、「ジヨン」は1982年韓国で生まれた女の子に一番多い名前です。彼女は30歳で優しい夫と結婚し、33歳で可愛い女の子を出産しました。普通の人生を歩んできた彼女は、ある日突然母親や友人が乗り移ったかのように振舞いはじめます。「普通」の人生の何が彼女を「普通」でいられなくしたのでしょうか。家族の在り方、ジェンダー、ケア労働について考えさせられる一冊です。



いのちの初夜

● 北條民雄（角川文庫 2020）

1 907年から日本のハンセン病患者は療養所への入所が強制され、徹底的に社会から排除されました。作者の北條民雄もその一人でした。ハンセン病との診断を受けたばかりに家族や友人との関係、学業や就職、未来への夢も断たれ、身体はハンセン病に侵されていく。「感染」への恐怖と強制される「隔離」。コロナ禍を生きる私たちはハンセン病患者の生を少しは理解できるのでしょうか。



古事記の世界

● 西郷信綱 (岩波新書)
岩波書店
1967)

イ ザナキとイザナミの結婚、国生み、火の神の出産によるイザナミの死、冥界のイザナミを訪問するイザナキ、三貴神（アマテラス、ツクヨミ、スサノヲ）の誕生、スサノヲの乱暴狼藉、アマテラスの岩戸籠もり、食物神の殺害、スサノヲの追放、ヲロチ退治、大国主の国譲り、天孫の降臨、山の神の娘との結婚、海の神の娘との結婚など『古事記』は魅力的な挿話に満ちています。

関連授業：古典に親しむ

関連本：西郷信綱『古代人と夢』（平凡社）『古事記注釈』（ちくま学芸文庫）、中村啓信『古事記』『風土記』（角川文庫）、石田英一郎『桃太郎の母』（講談社学術文庫）



平家物語

● 石母田正 (岩波新書 岩波書店 1967)

『平家物語』といっても唯一のオリジナル・テキストがあるわけではありません。延慶本、長門本、八坂本、覚一本など様々な諸本があり、最も読まれているのは覚一という琵琶法師が編纂したものです。『平家物語』のなかで最も魅力的な人物は誰でしょうか。巻一から巻五で権勢を振るい熱病で死ぬ平清盛、巻六から巻八で京都を支配する木曾義仲、巻九から巻一二で平家を追い詰め滅ぼす源義経。本書で最も魅力的に論じられているのは、「見るべきほどのことは見つ」といって海に身を投げる平知盛です。

関連授業：古典を学ぶ

関連本：兵藤裕巳『平家物語』（ちくま新書）、木下順二『子午線の祀り』（岩波文庫）、『平家物語』（岩波文庫）、『太平記』（岩波文庫）



絵巻を読み解く

● 若杉準 (新潮社 1998)

絵 巻の魅力は何でしょうか。絵巻はストーリーの面白さ、歴史資料としての面白さ、絵画表現としての面白さなど様々な魅力を有しています。日本画の源泉であり、漫画やアニメーションの元祖とも呼ばれています。

関連授業：日本文化論 I

関連本：『日本の絵巻』（中央公論社）、『日本絵巻全集』（角川書店）、辻惟雄『奇想の系譜』（ちくま学芸文庫）、四方田犬彦『漫画原論』（ちくま学芸文庫）、中条省平『マンガの教養』『マンガの論点』（幻冬舎新書）



歌舞伎

●

渡辺保

(ちくま学芸文庫)

筑摩書房

2001)

江 戸時代を代表する演劇は人形浄瑠璃(文楽)と歌舞伎です。近松門左衛門は京都の坂田藤十郎のために歌舞伎の台本を書いていました。歌舞伎の三大傑作とされる『菅原伝授手習鑑』『仮名手本忠臣蔵』『義経千本桜』はいずれも浄瑠璃の原作を歌舞伎に取り込んだものです。文化・文政の時期に活躍した鶴屋南北、幕末から明治に活躍した河竹黙阿弥は偉大な歌舞伎作者です。

関連授業：日本文化論 I

関連本：鶴屋南北『東海道四谷怪談』(新潮古典集成)、河竹黙阿弥『三人吉三廓初買』(新潮古典集成)、扇田昭彦『日本の現代演劇』(岩波新書)



監督 小津安二郎

● 蓮實重彦 (ちくま学芸文庫 筑摩書房 1992)

ドイツの映画監督ヴィム・ヴェンダース、アメリカの映画監督ジム・ジャームッシュなど世界的に影響を与えた小津安二郎の映画の魅力は何でしょうか。ギリシャの映画監督テオ・アンゲロプロス、イタリアの映画監督ベルナルド・ベルトルッチなど世界的に影響を与えた溝口健二の映画の魅力とどのように異なっているのでしょうか。本書を参考に考えてみてください。

関連授業：日本文化論 I

関連本：アンドレ・バザン『映画とは何か』上・下（岩波文庫）、ジル・ドゥルーズ『シネマ』1・2（法政大学出版局）、四方田犬彦編『映画監督溝口健二』（新曜社）、四方田犬彦『大島渚と日本』（筑摩書房）、木村建哉編『甦る相米慎二』（インスクリプト）、加藤幹郎『表象と批評』（岩波書店）



「いぎ」の構造

● 九鬼周造 (岩波文庫 1979)

その反対語は野暮(やぼ)だとされていますが、粋、意気とは何でしょうか。本書は実に繊細に「いぎ」を解明しています。

関連授業：日本文化論Ⅱ

関連本：ルース・ベネディクト『菊と刀』(光文社文庫、講談社学術文庫)、ラフカディオ・ハーン『小泉八雲集』(新潮文庫)、新渡戸稲造『武士道』(岩波文庫)、岡倉天心『茶の本』(岩波文庫)、内村鑑三『代表的日本人』(岩波文庫)



遠野物語

● 柳田国男 (岩波文庫 2007)

日 本民俗学を開拓した柳田国男の代表作です。昔話に興味のある人はぜひ読んでください。

関連授業：日本文化論Ⅱ

関連本：折口信夫『死者の書』（中公文庫）、南方熊楠『十二支』（岩波文庫）、宮本常一『忘れられた日本人』（岩波文庫）、柳宗悦『民芸四十年』（岩波文庫）、和辻哲郎『風土』（岩波文庫）、坂口安吾『日本文化私観』（新潮文庫）、山口昌男『道化の民俗学』（ちくま学芸文庫）



説話の森

● 小峯和明 (岩波現代文庫 2001)

『今昔物語集』『宇治拾遺物語』は説話集と呼ばれています。では、説話の魅力とは何でしょうか。本書は膨大な説話の森から、その魅力を取り出しています。

関連授業：日本古典文学史

関連本：佐竹昭広『下剋上の文学』（ちくま学芸文庫）、松岡心平『宴の身体』（岩波現代文庫）



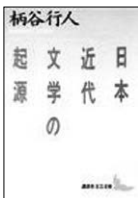
八犬伝の世界

● 高田衛 (ちくま学芸文庫 2005)

馬 琴の小説はどれも面白い。本書は、その面白さの一端を解明しています。

関連授業：日本古典文学史

関連本：高田衛『雨月物語』（ちくま学芸文庫）、
長島弘明『雨月物語の世界』（ちくま学芸文庫）、
尾形侑『座の文学』（講談社学術文庫）、
芳賀徹『与謝蕪村と小さな世界』（中公文庫）



日本近代文学の起源

古典文学と呼ばれるものが近代文学と異なっていることはいうまでもありませんが、文学とは何でしょうか。本書は「文学」が制度として存在していることを解き明かしています。

関連授業：日本文学概論

関連本：山本健吉『古典と現代文学』（講談社文芸文庫）、前田愛『都市空間のなかの文学』（ちくま学芸文庫）、芳賀徹『みだれ髪の家系譜』（講談社学術文庫）『絵画の領分』（朝日選書）

● 柄谷行人（講談社文芸文庫 1988）



源氏物語のテーマティスム

● 葛綿正一 (笠間書院 1998)

禁 じ手かもしれませんが、自らの貧しい本も挙げておきます。

関連授業：日本文学概論

関連本：葛綿正一『源氏物語のエクリチュール』（笠間書院）、『枕草子・徒然草・浮世草子』（北溟社）、『現代詩八つの研究』『馬琴小説研究』、『平安朝文学論』（翰林書房）



原日本・沖縄の民俗と芸能史

● 三隅治雄（沖縄タイムス社、2011年）

著者は、日本芸能の研究者であるが、特に沖縄の民俗芸能に関する研究を多く執筆している。本書は著者が1972年7月～12月までの沖縄タイムスで連載した内容に加え、続篇として沖縄の芸能（特に琉球舞踊・組踊）に関する現状などにもふれている。時代に沿いながら民俗芸能から琉球舞踊・組踊を多角的に捉えたものとなっており、入門書としても手に取りやすいであろう。



琉球の時代——大いなる歴史像を求めて——

● 高良倉吉（筑摩書房、2012年）

本書では、琉球史の中でも歴史学を中心としながらも、伝承話や「おもろさうし」、考古学などの成果も用いて「古琉球」という時代を捉え検討されてきている。歴史学や考古学などの成果を文学なども踏まえながら、実証的に検討した書となっている。



組踊への招待

著者は、組踊と日本芸能との比較など琉球芸能の研究者である。本書では組踊に関する歴史・作品に関する分析などが分かりやすく、なおかつ専門的に解説されている。組踊研究に興味のある方には是非読んでもらいたい。

(我部)

● 矢野輝雄（琉球新報社 2001）



—初心者から上級者までの琉球舞踊解説

琉球舞手帖

● 大道 勇 (ボーダーインク 2010)

著 者は長年にわたり NHK 沖縄放送局が製作している『沖縄の歌と踊り』のプロデューサーを務めていた。また、本書の特徴として琉球舞踊に歌われている歌詞の内容以外に著者が長年にわたり取材してきた中から、琉球舞踊の演目を演じる際の実演家の心構えや解釈なども記されている。そのため、本著のタイトルにも記されているように初心者から上級者向けの内容まで記された琉球舞踊の解説書となっている。

(我部)



那覇女性史(前近代編)なは・女のあしあと

● 那覇市総務部女性室編 (琉球新報社、2001年)

本書は琉球の女性をテーマに、歴史学を中心に多角的に検討している。その中には、琉球の女性がどのように説話や琉歌などで歌われているかなどを分析した論考などもある。琉球の女性が歴史上で果たした役割や琉歌などで読まれた内容などを知ることができる書となっている。



琉球・ 沖繩史の世界

● 豊見山和行編（吉川弘文館、2003年）

本書は、琉球史の中で古琉球～近代までの分野における歴史学が中心となっているが、考古・文学などの研究から琉球王国が形成されるにあたり、どのような時代を辿ったのかがわかる。本書中における、池宮正治氏の「祭祀（神歌・儀礼・のろ制度）と文学のなかの女性」は注目して是非読んで頂きたい。



「おもろさうし」の世界・波照間永吉「編」(角川選書 2007)

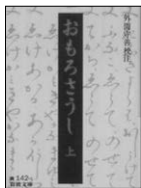
琉球の歴史と文化

文学・考古・歴史・民俗・言語などの様々な研究者が、琉球の古謡集である『おもろさうし』を多角的側面から検討した書である。『おもろさうし』を読み解くことでみえてくる古琉球から近世琉球における琉球王国の世界を知ることの出来る書である。

(我部)

本書は、沖縄の古典である「おもろさうし」をそれぞれ分野の第一線の研究者が読み解き、一般の読者にも分かりやすく解説したものである。考古学からは安里進、歴史学からは高良倉吉と豊見山和行、民俗学からは赤嶺政信、言語学からは高橋俊三、そして琉球文学からは波照間永吉と、現在の沖縄を代表する研究者たちが並ぶ。オモロ(神歌の一つ一つ)を理解するための用語も「おもろさうしの誘い」で解説され、オモロ初心者にもお薦めの一冊になっている。一つのテキストである「おもろさうし」は、それぞれの研究分野のなかでも無限の深まりと広まりを湛えている。巻末には「オモロ鑑賞」が収められ、オモロを読み解いていくことの魅力を肌で感じるができるだろう。

(西岡)



おもろさうし (上・下) ● 外間守善「校注」(岩波文庫 2000)

琉球王国の古謡集である『おもろさうし』。本書では、『おもろさうし』の語注や現代語訳が付されている。オモロを初めて読む人には必ず読んでもらいたい。また、語注などから琉球の民俗や歴史、地域に関することなどを読み取ることができるため、琉球文学を学ぶ者にとっては必携の書であろう。

(我部)

琉球の神々への祈りを綴った祭祀歌謡集「おもろさうし」(16～17世紀)。そこには、古琉球の歴史、社会、民俗、宗教、言語などが、集約された形であらわされている。「沖縄の万葉集」と呼ばれることもあり、沖縄人の心の拠り所とも言うべき沖縄最大の古典である。田島利三郎、伊波普猷が明治期に研究をはじめてからおよそ100年、かつては難解で解読不能と言われたオモロ(神歌)の解釈にも、現在、かなりの進展が見られている。その一つの到達点と言えるのが本書で、オモロすべて(1554首)に解釈がなされ、現代語訳が施されている。校注者の外間守善は、沖縄学を継承する研究者で、沖縄固有の信仰、民俗を世界的な視野のもとで追究している。沖縄戦(前田高地/ハクソーリッジ)で九死に一生を得たのち、沖縄文化の研究とその啓蒙活動に並々ならぬ力を注ぎつづけた。

(西岡)



古琉球

● 伊波普猷 (岩波文庫 2000 [1911])

現 在、琉球史の時期区分において、琉球の三山統一とされる1422年から1609年の薩摩侵攻までを「古琉球」と呼んでいる。その由来は本書のタイトルから来ている。それほどまでに伊波普猷が沖縄学にもたらした大きさが知れよう。

伊波は沖縄学において、戦前において大きな礎を気づいた。その伊波がどのような研究を行っていたのか。本書では、言語・文学・歴史にいたるまで多岐にわたっている。そのため、伊波の学びの広さと深さを垣間見る事のできる書となっており、沖縄学の様々な分野において、おさえるべき書。(我部)

ウ チナーンチュ (沖縄人) とは何か。その答えを見出そうと、おのれの人生をあがいたのが、沖縄学の父と呼ばれる伊波普猷 (1876-1947) である。琉球処分後、日本の国家に組み込まれた沖縄県のなかで、沖縄固有の文化は劣ったもの、改善すべきものとして内外からの排撃を受ける。旧制中学校時代、伊波は沖縄人を差別する校長に反発して、ストライキ事件を起こし、それがもとで退学させられてしまう。沖縄人としてのアイデンティティーに悩んだ伊波は、上京したのち、言語学を修め、それと同時に、歴史・民俗・書誌などのさまざまな分野から、おのれの、そして、沖縄の生きるべき道を見出すべく、沖縄固有の文化を掘り下げてゆく。その伊波の記念すべき処女作といえるのが本書『古琉球』である。その自序は、伊波を「沖縄学」へと向かわせる契機となった中学校時代の恩師、田島利三郎 (1869-1931) への感謝の気持ちで満ち溢れている。(西岡)



沖繩の歴史と文化

● 外間守善 (中公新書 1986)

本 書の前半では琉球・沖繩史の概説を行い、後半では琉球の言語と文化として、琉球のことばが言語学および文学の方面から呪術歌謡・叙事歌謡・抒情歌謡・劇文学のジャンル分けをしてわかりやすくまとめられている。琉球の歴史・言語・文学の基礎を知る上で重要な書である。

(我部)

沖 繩の歴史・文化に関する入門書として最適の本である。沖繩の文化を太平洋圏という広い視野で捉え、様々な学問の観点から分かりやすく余すところなく説明されている。序章「太平洋文化圏の中の沖繩」、第1章「沖繩の歴史のあゆみ」、第2章「沖繩の言語と文化」、第3章「神歌にみる宮古・八重山の歴史」という構成になっている。沖繩文化はチャンプルー文化といわれるが、著者の外間守善も、沖繩文化の複合性ということで、染織、工芸、酒など沖繩の生活を彩ってきた文化が、さまざまな方面の影響から生み出されたことを示している。また、沖繩方言と日本古語との関係、沖繩語による現代的表現の取り組みなど、言語を中心に据えた文化の読み解きからも多くの示唆を汲み取ることができる。また、沖繩地域のみならず、宮古・八重山地域にもしっかりと目配りが行き届いている。

(西岡)



新南島風土記

● 新川 明 (岩波現代文庫 2005 [1978])

当時、沖縄タイムスの記者だった新川明が、八重山支局に勤務していた時代に綴った鮮烈な八重山地方の紀行レポート。1960年代、日本は高度成長期を迎え、沖縄では米軍統治が続いていた。そのなかで、沖縄でももっとも果ての地域と言われた八重山において、新川は、人間が生きるとはどのようなことなのか、その原点を発見する。圧制に苦しんできた島の人々が織り成す歌や民俗芸能の数々。ややもすると、那覇や首里を中心に描かれがちな沖縄文化に対して、それぞれの地域に根づくシマ固有の文化に新川は惹かれてゆく。その体験を経たあと、新川は反復帰論という思想を生み出していくのである。この本には、受け継いでゆくべき島人（シマンチュ）の精神が語られているといえるだろう。



沖縄女性史

● 伊波普猷 (平凡社ライブラリー 2000 [1919])

沖 縄学の父と呼ばれる伊波普猷 (1876-1947) は、女性についても当時としては革新的な考えを抱いていた。日本女性史研究の出発点である『大日本女性史』の発刊が1938年 (昭和13年) であることを考えると、本書『沖縄女性史』の1911年 (大正8年) 発刊は伊波の視点の新しさを証明するものといえよう。元来、琉球では、「政治=男性」「宗教=女性」という役割分担がなされ、女性の宗教的な権威が高い社会であった。首里王府の公認の女性祭祀者であるノロをはじめ、民間で信仰されているユタなどの存在も、宗教世界における女性の果たす大きさを物語っている。伊波は、古琉球から続く女性優位の宗教世界を見出し、農村におけるモーアシビ (野遊び) と都市における遊女の発達を見据える。文学では女流歌人恩納ナビーの活躍を描写し、民俗ではハジチ (刺青) や服装の習俗などを考察している。



琉球語の美しさ

● 仲宗根政善 (ロマン書房本店 1995)

仲 宗根政善 (1907-1995) は、沖縄戦のさなか、ひめゆり学徒隊の引率教師であった。多くの教え子を失った仲宗根は、戦後、反戦平和の道を求め続けるが、彼は若い頃から琉球方言の研究を志す方言学者でもあった。沖縄戦により、熱心に集めていた彼の故郷のことば、今帰仁方言を綴ったノートも灰燼に帰してしまう。しかし、戦後、仲宗根は再び今帰仁方言の収集に取り組み、ついにそれは『沖縄今帰仁方言辞典』(1983)へと結実する。仲宗根は琉球大学で教鞭をとったが、その誠実な人柄と研究・教育に対する真剣な姿勢に薫陶を受けた教え子は数多い。『琉球語の美しさ』は、彼が書きのこした珠玉の方言エッセイ集である。仲宗根の個人的な体験が、琉球方言まじりの文章によって生き生きと蘇ってくる。仲宗根が琉球語にどれほど愛情を注いでいたか、そして、琉球語を知ることとはどういうことなのか、本書を読んで感じてほしい。



日本語の系統

● 服部四郎 (岩波文庫 1999 [1959])

服部四郎 (1908-1995) は日本を代表する世界的な言語学者である。特に、日本語はどこから来たのか、日本周辺の言語が日本語とどう関係しているのかについて、優れた論考を残している。その中で、琉球語と日本語との関係性の追究も重要な位置を占めていた。本書には、琉球語と日本語がどのくらい離れているのか、琉球語を話す民族の起源はどこか、琉歌とはどのような文学なのかなど、学問として厳密に追究しつつも、服部の琉球に対する熱い思いが随所に表れている。また、最後に所収の「奄美群島の諸方言について」は、同じ琉球方言に属する奄美方言への深い関心を物語る。服部四郎は、仲宗根政善の一年後輩であるが、大学時代から仲宗根と学問の交流を深め、互いの尊敬の念は終生変わることがなかった。厳格な人物として知られた服部であるが、仲宗根から沖縄について多くのことを学び、沖縄に対する深い愛情を持ち続けたのである。



〈古典を読む〉 おもろさうし

● 外間守善（岩波同時代ライブラリー 1998 [1985]）

沖 縄の古典である「おもろさうし」。16世紀から17世紀、首里王府によって集められた神歌の数々は、古琉球に生きた沖縄人の心の風景を余すところなく写し出している。沖縄固有の思想が記された沖縄人の聖典といっても過言ではないだろう。沖縄人にとっての他界であるニライカナイとオボツカグラ、太陽崇拝と日子（てだこ）思想、英祖や察度など沖縄の歴史を切り拓いた英雄たち、勝連文化を築き上げた阿摩和利の活躍、沖縄開闢の神であるアマミクと稲作の来た道、姉妹が霊的に兄弟を守護するという「おなり神」信仰、抒情文学の先駆けとしての「ゑさおもろ」および「ゑとおもろ」。オモロ研究の第一人者である外間守善が、沖縄の歴史と民俗を見据えながら、沖縄人の信仰世界や心象風景をくっきりと照らし出す。



美麗島まで

— 沖縄、台湾

家族をめぐる物語

● 与那原恵(ちくま文庫 2010年)

東 京で生まれ育った筆者は、母と父の故郷である「沖縄」を探す旅に出た。しかし、母や、医者であった母の父(祖父)をたどる旅は、沖縄のみならず、ロシアから、台湾へと広がっていく。文化人的な医者として幅広い交友関係を持っていた祖父。「沖縄人女優第一号」だったかもしれない祖母。沖縄を代表する画家であった祖父の弟。そして、祖父が台湾で開業したため、台湾育ちとなった母。母は、その後、台湾から上京し、沖縄出身者として初の女性アナウンサーとなる。そして、良家の出身で沖縄県庁を辞めてまで上京し、母と結婚した父。時代は全面戦争へ突入しようとしていた。

「美麗島」とは台湾のこと。筆者は、自らのルーツをたどるなかで、沖縄と台湾の近代の一面を見事に浮かび上がらせている。その歴史の渦の中で、家族の物語が、さまざまな人々との交流が、生き生きと描かれている。



ル
リ
ン

● 夏目漱石 (新潮文庫 1952)

高校の国語で取り上げられることも多い『ココロ』。しかし教科書に載っているのはごく一部。全体を通して読むと、また新たな発見があるはずです。

学生の「私」がある夏の日、鎌倉の海岸で「先生」に出会い、「先生」の家に親しく出入りするようになるというところから『ココロ』は始まります。「先生」は仕事もせず、美しい奥さんと二人で静かに暮らしています。大学卒業後の暮らしにはっきりとした展望が持てない「私」はそんな「先生」に憧れますが、「先生」は若い頃の自分の所業を深く後悔していて……。

ここから先は実際に読んでみてください。そして教室で議論しましょう。多様な読み方ができるのが『ココロ』の最大の魅力なのです。

関連授業：日本文学を読むⅢ、現代文学理論Ⅰ



水 滴

● 目取真俊 『水滴』文春文庫、2000

もしくは『目取真俊短篇小説選集2 赤い椰子の葉』影書房、2013)

今 帰仁村出身の小説家・目取真俊は「水滴」で1997年の芥川賞を受賞しました。戦後世代の目取真が、戦争体験者の記憶に正面から取り組んだ小説が「水滴」です。

沖縄戦から50年以上経ったある日、徳正という老人の足が突如としてふくれあがり、親指の先から水が滴り落ちはじめます。床についたまま身動きできない徳正の前に、沖縄戦で死んだ兵隊たちが毎夜姿をあらわし、その水を飲むのです。徳正は逃げ続けていた戦争の記憶と向き合うことになります。

文庫版は残念ながら絶版ですが、古本では比較的容易に手に入れることができます。また、この著者の他の作品にも興味があるという人は『目取真俊短篇小説選集』を手にとることをおすすめします。



父と暮せば

● 井上ひさし (新潮文庫 2001)

広 島に原爆が投下されてから3年後の夏。図書館で働く23歳の女性・福吉美津江の前に、原爆で死んだ「おとったん」の幽霊があらわれます。美津江が、図書館の利用者である一人の男性に心動かされたことを感じとって出て来た「おとったん」は、「恋の応援団長」として奮闘します。しかし美津江は、原爆で死んでいった人々のことを考えると、自分だけが幸せになることはできない、と言い張ってききません。

はたして「おとったん」は美津江の心をとくことができるのでしょうか？ 原爆という破壊的な出来事を生き延びた人々が自らの人生をいかに生き直していくかをたどる物語です。



独り舞

● 李琴峰 (講談社 2018)

台 湾人作家・李琴峰は、第二言語である日本語によって小説を書く作家です。台湾の文化や、漢詩の伝統を極めて自然に取り入れながら、日本社会に外国人として生きる性的マイノリティの主人公を描く李琴峰の作品は、現代日本語文学のなかで極めて重要な意味を持っています。

李琴峰のデビュー作である『独り舞』の主人公は、性的マイノリティの台湾人の女性です。主人公は名門女子校に通っていた高校時代、お互いを高め合うような恋人を持ちますが、思いがけない「災難」に見舞われたことで恋人と別れ、苦しい大学生活を送ることになります。

大学卒業後、主人公はより自由に生きられる環境を求め、名前を変えて日本に渡ります。しかし日本企業で仕事をしながら性的マイノリティのコミュニティにも居場所を見つけようとしていた主人公の生活は、とある事件によって一変します。それは、自分の身に起きた過去の「災難」にあらためて向き合わなければならない出来事でもありました。追い詰められた主人公は、すべてを投げ出し、外へ、外へと移動していきますー。

日本文学は、国籍と使用言語が一致している「日本人」によってのみ書かれるものでも読まれるものでもありません。「日本語」という言語にアクセスできる多様な人々に開かれる上質な文学に、ぜひ触れてみてください。



カクテル・パーティー

大城立裕（岩波現代文庫 2011）

1967年、沖縄初の芥川賞受賞に輝いた「カクテル・パーティー」。米軍統治下にあった沖縄において、この受賞は社会的にも大きな意味を持つものでした。

「カクテル・パーティー」は、中国語サークルのメンバーである米軍将校、中国人弁護士、日本人新聞記者、役所勤めの沖縄人（主人公）の4人が親善を深めるパーティーの場面で始まります。しかしパーティーから帰宅した主人公は、娘が顔見知りの米兵にレイプされたことを妻から知らされます。レイプ事件の告訴をめぐり、米軍占領の実態や親善の欺瞞が暴かれていくことになります。

初出から50年以上を経て新たに文庫となったことで、現代の読者が手に取りやすくなりました。沖縄の「いま」を考えるために、ぜひ読んでみてほしいと思います。



超入門! 現代文学理論講座

● 亀井秀雄監修／蓼沼正美著（ちくまプリマー新書 2015）

み なさんは国語の授業などで、「作者の思い」を問われたことはないでしょうか。

大学の教室でも、「作者の思いを明らかにしたい」という声は学生からしばしば耳にします。

しかし、作者は作品を支配する神ではなく、読者も「作者の思い」に基づいた読み方の「正解」を探すためにテキストを読むわけではありません。

「作者の思い」という縛りから自由になること。

作者と作品を切り離して読んでみることに。

そのようにして初めて生まれてくる、新しい文学の読み方もあります。

そういう読み方を可能にするために心強い武器となるのが「理論」です。

本書は文学の世界を広げてくれる「理論」をわかりやすく学ぶために最適の入門書です。

ぜひ手にとってみてください。

関連授業：現代文学理論Ⅰ・Ⅱ



ひかりごけ

● 武田泰淳 (新潮文庫 1964)

『ひかりごけ』は実際の事件を踏まえて描かれたフィクションです。冬の北海で船が難破してしまい、流氷に閉ざされた洞窟に行き着いた船長と3人の船員。暖房も食糧もない状態で船員は次々に倒れていきます。しかし船長は、先に死んだ仲間の肉を食べることでこの地獄を生き延びるのです。

私たちは普段、人間を食物として捉えてはいません。そのため、この小説はとても衝撃的です。しかし、人をただ殺すことと、食べるために人を殺すことはどちらが重い罪なのか？ 死んだ人を食べることはどんな罪になるのか？ そもそも、なぜ人が人を食べてはいけないのか？ 物語後半の、船長が裁判にかけられる場面ではこれらの問いが追求されていきます。

「食べる」ということについて私たちが持っている「常識」が覆される……そんな読書をぜひ体験してみてください。



記憶／物語

● 岡真理 (岩波書店 2000)

戦 争や殺戮、性暴力など、破壊的な出来事を当事者が語るのは、非当事者が考える以上に難しいことです。そしてもし自分の身に起こったことを語らないままに当事者がこの世を去ってしまったら……その出来事は「なかったこと」になってしまうかもしれません。

出来事を歴史から消さないために、それらは物語られ、他者に受け渡され、記憶される必要があります。本書では、小説や文学を通して出来事の記憶を分かち合うことがさまざまなかたちで試みられています。苦しみを語る言葉が、その苦しみを分かちあってくれる誰かとつながるための言葉にもなる。そのような希望を抱かせてくれる一冊です。



拝啓、 本が売れません

● 額賀滂 (KKベストセラーズ 2018)

本 書の著者は1990年生まれの若い新人作家です。

文学賞を受賞してデビューを果たしたものの、自分の本がなかなか売れない。

おもしろいと思うものを書き、それをおもしろいと思ってくれる人がいるから本になるのですから、「本の中身がおもしろい」ことは、市場に出ている本の前提です。

おもしろい本なのに売れないのは一体なぜなのか？

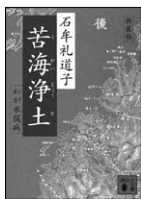
そこで著者は、売れる本とはどんな本なのか、さまざまな人々を巻き込んで研究をはじめます。

編集者、書店員、webコンサルタント、映像プロデューサー、装丁家……。

一冊の本を作り上げ、市場に出し、販売し、宣伝することは作家だけの力ではできません。

さまざまな立場の人々に取材し、教えを乞いながら、著者は自分の本に足りない「何か」をつかみ取ろうと奮闘します。

書くことに興味のある人はもちろんのこと、書店の仕事や出版業界に興味のある人にもぜひ読んでほしい一冊です。



新装版

苦海浄土

わが水俣病

● 石牟礼道子（講談社文庫 2004）

「公害の原点」と言われた水俣病。工場廃水に含まれていた水銀が原因で多くの人々が病に苦しみました。水俣で育った石牟礼道子が、病のために発話もおぼつかなくなった人々に寄り添い、書き綴った「魂のことば」の鮮烈さは色褪せることはありません。

水俣病の原因となった工場には、水俣市の人々の多くが雇用されていました。そのため、水俣病問題は工場に勤める人々と患者とを引き裂くものともなってしまいました。「公害」がもたらしたものを知り、考えることは、現在の私たちの問題にもつながってくるはずです。



戦争は女の顔をしていない

● スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ、三浦みどり訳（岩波現代文庫 2016）

第 二次世界大戦時、旧ソヴィエト連邦では 100 万人を越える女性が従軍しました。炊事や洗濯を担った人、看護師や医師として働いた人、兵士として前線で銃を取った人など、女性たちの戦争体験は極めて多様でした。

ここに集められたのは、女性たちの体験、語りです。読み進めるのが辛くなるような戦争の惨禍と、子どものこと、愛した人のこと、家族のこと、戦後のことなどが微細に語られていきます。

言葉というのは不自由なもので、どのように語ったとしても語り尽くせないものが残ります。語られることはほんの一部、ほんの上澄みだけなのかもしれません。そう考えると、戦争はここに語られているようなものであった、と理解することはできません。ここに語られている以上のものであった、ということが読者に突きつけられます。



夜の言葉 ファンタジー・SF論

● アーシュラ・K・ルーグウィン、山田和子他訳（岩波現代文庫 2006）

『ゲド戦記』や『闇の左手』を書いたルーグウィンが、自身の創作について語った講演や随筆をまとめた一冊です。難しい箇所もあるかもしれませんが、特に自分で小説を書いてみたいと考えている人、ファンタジーやSF好きな人にはぜひ読んでもらいたいと思います。

ファンタジーやSFを書くとはどういうことか、一つの世界を創造するために必要なものは何か——。さまざまな問いを重ねていくうちに、言葉で世界を形作ることの困難と喜びが見えてきます。



漢字の常識・非常識

● 加納喜光 (講談社現代新書 1989)

日 本人が使っている漢字は中国から伝来したことは知られています。この本はこれまでの漢字の解説とは異なり、現代人の感覚で漢字を観察し、分かりやすく解説し、知的好奇心を刺激する一冊です。

例えば、第2章では「ストレスを起こした漢字たち」と題し、漢字のダイエットを説明しています。正しいダイエット法、失敗したダイエットによって変化した漢字、変身した漢字を現代人の視点で解説しています。また、第7章の「カルチャーショックを受けた漢字」では日本文化の影響で変化した漢字、中国が日本から輸入した漢字などを紹介しています。

併せて読んで欲しい本に、『漢字の文化史』阿辻哲次 (NHK ブック) があります。



日本地図から 歴史を読む方法

● 武光誠 (KAWADE 夢新書 1998)

「沖縄は東海岸側では街が発展しない。しかし、日本本土では大都市は東海岸側に発展した。」

「古都 奈良や京都は何故、盆地で発展したか。」を分かりやすく解説しています。また、日本の文化と歴史を季節、海流、山脈、平野、街道などの自然地理の観点から捉え説明しています。特に読んでもらいたいのはこの本の最後にある「アジア貿易の先進地、沖縄の特異性とは」(201頁～)です。

歴史は人間の活動を文字で記録したのだと言えますが、その人々は居住した地域の気候、地形の影響を受けて生活してきました。歴史を時間軸と記録された文言だけで学ぶのではなく、自然と密着した人間の活動として見直す視点と思考を訓練するのに手ごろな一冊です。



本の世界をめぐる冒険

読 書が好きだという人でも実は本自体のことはあまり知らないのではないのでしょうか？本っていつからあるの？今我々が読んでいるいわゆる「紙の本」ができるまで人はどのように読書していたの？そういった疑問に答えてくれるのがこの本です。2時間で読めると銘打たれているだけありさっと読めてしまうので、ぜひ冒頭にあげた疑問に興味がある人は読んでみてください。

● ナカムラクニオ（NHK出版 2020）



図書館のキリギリス

● 竹内真（双葉社 2013）

学 校図書館で働く事務職員である、学校司書が主人公の小説です。教科書などではなかなか頭に入っていない、図書館での実際の仕事ぶりについて物語を通して知ることができます。学校司書の仕事ぶりや司書教諭との関係など、もちろんこの本に出てくる関係性が全てではないですが、少し理解が進むのではないのでしょうか。図書館の本を通じて高校生たちが成長していく姿もとても共感が持てます。続編も2冊出ているので、気に入ったら続きも読んでみてください。



図書館100連発

この本では、図書館で実際に実施されている様々な活動が100個紹介されています。一つ一つの活動はそれぞれ1ページにコンパクトにまとめられているので読みやすいですし、通読しなくても興味がある活動だけ読むこともできます。

図書館と言えば、ただ本を借りる場所というイメージはまだまだ強いかもしれません。しかし、この本を通じて、図書館ってこんなこともしているんだという図書館の懐の深さを知ることができると思います。

● 岡本真、ふじたまさえ（青弓社 2017）



書物史のために

著者は書物史の専門書を何冊も書いているこの分野の著名な研究者です。その著者がいろいろな雑誌に書いた書物史関係の短い文章をまとめたのが本書です。前にあげた「本の世界をめぐる冒険」が面白かった人は次の一歩としてお勧めしたいと思います。この本を通じて、中世から現在に至るまでの本を書くこと読むことの歴史についてどのような研究が行われているのかの一端を見ることができでしょう。実際に図書館を使ってどのように研究をするのかという描写もあり、そのあたりもお勧めです。

● 宮下志朗 (晶文社 2002)



知の広場

図書館と自由

イタリアの図書館で館長を勤めた人物による本。インターネット時代における公共図書館の果たす役割を論じています。公共図書館の可能性を、「あらゆる種類の資料と人を受け入れる共通の経験の場」「分別を持って比較しあい、議論できる社交の場」という「知の広場」の機能に注目して述べている。また実際に欧米の図書館のユニークなサービスも紹介されており、図書館というもののイメージを広げることできるでしょう。

●アントネツラ・アンニヨリ（みすず書房 2011）



この世にたやすい仕事はない

● 津村記久子（日本経済新聞社 2015）

本書は『ポトスライムの舟』で芥川賞を受賞した津村記久子さんの小説です。内容は仕事に疲れた女性が、5つの仕事を転々としながら働くということについて考えていく連作になっています。この小説に出てくる仕事は一日中監視カメラで人を見張ったり、バスのアナウンスの内容を考えたりと、チョット変わった仕事ばかりです。世の中にはこんな仕事もあるのだと興味深く読むことができますと思います。就職活動の参考にはならない仕事ばかりかもしれませんが、仕事というものに興味を持つきっかけにはなるのではないのでしょうか。語り口も軽妙でとても読みやすい小説です。小説の中で、主人公は様々な仕事を通じて、仕事との向き合い方を考えていきます。働くということの意味について、主人公と一緒に考えてみてください。とはいえ、そんな堅苦しいことを考えなくても普通に面白い小説なのでまずは気楽に読んでみてください。



サラエボ 1992-1995 ●ぼくたちは戦場で育った

●ヤスミンコ・ハリロビッチ (集英社インターナショナル 2015)

□ シアがウクライナに侵攻したことに代表されるように、世界では今この瞬間にも戦争が行われています。本書は、1992年から4年ほど続いたサラエボ包囲戦を戦時下で過ごした子供たちにSNSを通じて呼び掛けて集まったメッセージからなっており、戦争から遠く離れてしまった我々に戦争とは何かを教えてくれるそんな本です。この本に掲載された数千のメッセージは、戦争中彼らが何を考えていたのかをリアルに浮かび上がらせてくれています。つらい別れや頭上を砲弾が飛び交う恐怖、街中でスナイパーに狙われるという日々について想像できるでしょうか。子どもが子どもでいることができない状況を戦争はもたらすのです。そんな日常が90年代にも存在していたし、現在でも戦争のただ中にある人々がいることを知ってほしいと思います。



サッカーの敵

今年は4年に一度のサッカーワールドカップの年です。ということで、サッカーに関する本も一冊紹介したいと思います。とはいってもこの本は今回のワールドカップに直接関係するわけではありません。ワールドカップに向けてメディアでは日本代表を中心に対戦国や開催地についての沢山の情報もたらされるでしょう。そういったエピソードは黙っていてもみることができます。しかし、これだけ大きくなったサッカーの世界にはそれだけではないさまざまな影がつきまっています。この本を読み、サッカーと政治や文化の関わりについて、世界中でどのようなことが起こっているのかを知ってください。1994年のアメリカワールドカップ後ぐらいままでと少し古いのですが、サッカーと政治の内幕を描いていて、とても興味深いです。

● サイモン・クーパー（白水社 2001）

夢破れても…

我部大和

9号館608

私は、高校時代に琉球史・琉球文化に興味があった。また、幼い頃から家庭の経済は苦しい状況であったため、教員になれば親を楽にできると思い、高等学校の地理歴史科の教員を目指し、大学へ入学した。

ところが、大学でのカリキュラムの改正などにより、地理歴史科の免許を取ることが事実上出来なくなってしまった。教育学部で行っていた教職科目、他学科の概論などほとんど全てを履修したものの、教員免許取得に必要な必修科目2科目と教育実習を履修することができず、結果として私の夢はかなわなかった。

一方、大学へ入学後A先生の講義を聞いて、琉球と中国との関係の深さや琉球文化が中国との関わりによって育まれてきたものが多くあることを知り、興味を持ち始めた。その後、大学2年の頃に琉球芸能の研究者であるO先生が着任され、芸能の研究にも興味を持ち始めた。実は、幼い頃から琉球舞踊を学んでいて、「なぜ冊封使を歓待するために琉球舞踊や組踊ができたのか？」ということに疑問を抱いていた。A先生とO先生がいることで私の長年抱いていた疑問が解決するかもしれないと考え、琉球芸能と中琉関係の両方を往き来する研究をしようと考えた。

大学3年生の時、初めてのゼミで自らの研究テーマについて調べ発表したのが、芸能に関する歴史史料が少ないので厳しいのではないかと指摘があり、やはりできないかと考えていた。ところが、とある先輩からまだ手つかずの芸能関係の史料があると勧められた。その史料の研究が、現在の私の研究テーマとなっている。そのあとA先生にこの研究は大学院でもやっていける。君はどうしたいかと尋ねられた。私としては、高校教員の夢が叶わなくなり、どうすればいいかと悩



んでいた。悩んだ結果、大学院へ入学したいと入試に挑戦し、無事に入学した。

大学院へ入学後、A先生とO先生からの厳しくも暖かい指導を受けた。その間、大学院在学中に両先生からは交換留学として中国へ留学することを後押しして頂いたことなど沢山の学恩を受けた。私は決して優秀な人間ではないものの、両先生との出会いや経済的に苦しくても私のやりたいことを応援してくれた家族などの支えによって、今、本学で皆さんに琉球芸能や琉球文化を教えることになった。

1年生として入学したみなさんには、大学に在学している間にいろんな人と出会い、多様な考えに触れ、様々なことにチャレンジしながら、自らの道を突き進む大きな心の糧を得てほしい。私は非力だが、ほんの少しだけそのお手伝いができれば嬉しい。

出会い

桃原千英子

9号館607

学会では、著名な研究者からお話を伺う機会が多くある。昨年暮れ、国語教育の学会で出会ったY先生は、絵本の読み聞かせの効果について研究されている学者であった。テンポ良い関西弁で、学校にも出向いて読み聞かせを実践されているとお話になった。

中学校に勤めていた私にとっても、絵本の持つ教育力は強く実感するものであった。私は古典の授業をきっかけに、絵本を読み聞かせするようになった。幼児期に「かぐや姫」や「かちかち山」「耳なし芳一」等の昔話を読んで聞かせてもらった子に比べ、そうでない子は古典へのハードルがグッと上がる。私の幼少期は、「まんが日本昔ばなし」というテレビ番組で、日本の古典への入り口が自然と開かれていたが、今はそれが各自に任されてしまっている。授業のスタートに当たり、学習者のスタートラインを揃えるために始めたのが、絵本の読み聞かせであった。

大学院派遣後は、後輩の「読み聞かせの研究」や「杉みき子さんの読書会」に刺激を受けて、機を見てはあらゆる絵本を読み聞かせした。一人では本を読むのが苦手な生徒も、次第に話に引き込まれ、没頭し、目が輝いてくる。そんな姿を見るのは、嬉しいものであった。教師が紹介した本を、更に友達に紹介する様子を見ていると、他者が本の世界を拓くきっかけになっていることが分かる。

学校での読み聞かせの話で、一通り盛り上がった後、Y先生は右のポケットから500円玉くらいの桃色のバッジを取り出した。

「大学生にも読み聞かせは大切だ。読み聞かせこそ、未来の子どもを救う。」

名刺代わりに差し出された缶バッジには、Y先生の似顔絵



と「地球防衛軍—絵本の読み聞かせ隊」という文字が書かれていた。

振り返ってみると、私の読書の道も、文学そのものへの関心と言うよりも、他者からの刺激によって拓かれていったように思う。

中学1年の時、司書の先生が催した上映会で『塩狩峠』に出会ってから、『車輪の下』や『罪と罰』、太宰の作品を読むようになった。中学時代に、何気なく手にした本であったが、今考えるとキリスト教や倫理といった思想で共通している。それらを通して社会の仕組みや人と人との関係、人の心といったものへの関心が形作られていったように思う。

それが、教師として生徒の前に立った時、授業が上手くいかず悩んだ時に、「教師の働きかけと生徒の心」、「教師の権威性が作文作成に与える影響」、「国語科教育による心の育成」などの課題意識を持つことにつながった。そして臨床教育への関心は、大学院でナラトロジー専門家との出会いを導き、現在の研究の扉を拓いた。

人との出会いが、本との出会いを生み、本との出会いが、新たな自己への出会いとなった。

本は、生き方を探し続けた私の『防衛軍』であり、行き先を示す『羅針盤』である。

桃色のバッジを見ながら思った。

奈良のナイムン —柿食へば—

西岡 敏

5号館 402

私の人生も50歳半ばに差し掛かっていますが、「ウチナーグチ（沖縄語）」と出会ったのが20歳の時でしたので、もう30年以上も関わっていることになります。これまで沖縄語と関わる中で、色々と考えさせられることがありました。

沖縄語の話者の方から、しばしば「ウチナーグチ（沖縄語）は語彙が少ないから」と言われたことがあります。これは日本語（話者は日本語とのバイリンガル）を念頭に置いて言われていて、日本語の語彙をウチナーグチ（沖縄語）に翻訳できないときに言われます。この言説を私なりに分析すると、一つは、日本語は国家の近代化とともに語彙を増やしているが、沖縄語はそれが行われていないこと、もう一つは、そもそも沖縄にはないものを沖縄語で表現する必要はなかったこと、こうした理由が挙げられるのではないのでしょうか。後者の理由は、視点を入れ換えて、例えば、「ゴーヤー」を日本語でどう表現するか、といったことを考えるとよいかと思います。まだ私が20歳代の頃ですが、沖縄と東京を行ったり来たりしていたとき、東京のスーパーでも当時は珍しかった「ゴーヤー」が出回りだしていて、「れいし」と商品のラベリングがあり、何のことやらと思ったことがあります。後に「ゴーヤー」を日本語で「蔓荔枝（つるれいし）」と言うことを知りましたが、今では、東京のスーパーでも「ゴーヤー」とラベリングされているところも多いでしょうね。

「ゴーヤー」（苦瓜）という沖縄らしい食べ物の話になりましたが、反対に「沖縄にはないものを沖縄語で表現する」で私が真っ先に思い出すのは、「柿」という果物（ナイムン）です。沖縄語の辞書として有名な『沖縄語辞典』（1963年発行）に、この語彙は載っていません。そもそも「柿」は沖縄に生育していません。ところが、最近、「しまくとぅば検定」という沖縄県が行う検定試験に関わることになり、もっとも初級である9級の単語集（沖縄中南部言葉編）には「柿」が「かち」とい



う語形で収められています。沖縄中南部では多くの地域で「き」が「ち」になるので、「柿」を「かち」というのはありうる話です。ただ、「柿」は沖縄には無い木なので、「かち」（柿）が語彙としてあるのは、ヤマト（本土）からやってくる商品作物として「柿」があるからでしょうし、それこそだいぶ新しい単語かもしれません。

私の出身が奈良ということもあり、「柿」には自分にとってどこか「ソウルフード」的な響きがあります。冬の寒い日、干し柿をよく石油ストーブの上でアルミホイル（銀紙）にくるんで温めてホクホクと食べました。渋柿だったものが干されて、こんな甘くて美味しいものになるのかと、干し柿を発明した人はすごいなあと頬張りながら思ったものです。また、これも幼い頃のことですが、実家の庭に一時、父親が富有柿（甘柿）の小木を植え、大きくしようとしていました。「桃栗三年、柿八年」とはよく言ったもので、家の玄関近く（東側）に植えていたのですが、なかなか大きく育ちませんでした。それで、庭の別の畑（アタイグラー）に近いところ（西側）に移植したのですが、それでもうまく育たず、結局、ようやく実を一つだけ生（な）らして、葉を落とし、二度と実を付けることはなく、枯れ木となってしまいました。

その「一つだけ」生^なった実は？ ——もちろん食べました（鳥に突つかれないうちに！）。ふつうに、とても甘い柿でした。その貴重な一切れを食べる瞬間は、和室の中で、切られた柿の入った皿を差し出す、亡き母親の面影とともに、今でもフラッシュバックされます。

ナリヨ ナリニワニ タダ テイツイドウ ナタル
実れやう 実れ庭に ただ 一つど 実たる
カチ カミバ ウムル ウヤヌ フウシ
柿 食めば 思る 親の 恩義

歌舞伎案内

葛 綿 正 一（くずわた・まさかず）

5号館 408

出雲のお国による「かぶき踊り」から流行したのが女歌舞伎である。しかし、風紀を乱すとして禁止される。美少年による若衆歌舞伎が同じ理由で禁止された後、容色本意の歌舞伎から演劇の方向に転換したのが今日の野郎歌舞伎である。したがって、男が女を演じる女形が登場することになる。もともと「かぶく」とは異様なことをする意味であり、歌舞伎にはアナーキーなアウトローの精神が宿っている。

経済がバブルの活況を呈したとされる元禄時代に二大スターが登場する。和事（わごと）を得意とした京都の坂田藤十郎は、いわばラブシーンの名手である。近松門左衛門は、藤十郎のために台本を書いた。それに対して、荒事（あらごと）を得意とした江戸の市川団十郎は、アクションスターである。団十郎が睨むと風邪が治るとされた。成田山新勝寺を信仰する団十郎に、観客は「成田屋」と声をかけるのである。初代の団十郎は楽屋で刺殺されており、荒々しい生涯を印象づける。市川家の得意演目を「十八番」と定めた七代目の団十郎は贅沢を咎められ、江戸から追放された。八代目の団十郎は人気絶頂で自ら若い命を絶った。団十郎一家の逸話は数え切れない。ちなみに、明治の二大スターは九代目の団十郎と五代目の尾上菊五郎だが、奇しくも同じ年に亡くなっている。

私が歌舞伎最高の演目と考えるのは鶴屋南北の『東海道四谷怪談』と河竹黙阿弥の『三人吉三廓初買』である。退廃的な文化・文政期に活躍した南北の芝居は驚くほど現代的といえる。『四谷怪談』はリストラされた侍が悪事に手を染めていく物語だからである。三代目菊五郎、七代目団十郎、五代目松本幸四郎などが初演をつとめた。



幕末から明治に活躍した黙阿弥の芝居もまた素晴らしい。『三人吉三』は同じ名前をもつ盗賊の物語であり、怪盗ルパン三世のような話といえばわかりやすいかもしれない。女装した盗賊がお嬢吉三、道を踏み外した侍がお坊吉三、二人のために自分の妹と弟を殺すのが和尚吉三である。その入り組んだストーリーはハリウッド映画よりも面白い。

さて、そんな歌舞伎は現代の映画や漫画にも影響を与えているのである。組踊への影響も無視できない。ぜひ一度は歌舞伎を見ていただきたいと思う。

〈付記〉

「琉球新報」2014年1月7日～6月18日に隔週でエッセイを書きましたが、「薄桜記」の監督名を誤記したので御訂正ください。

虎麻呂くん

田場裕規

5号館403

2019年、コロナなど夢にも現れない平和な時間を過ごしていた。夏から秋にかけて、我が家に犬を迎えたいという衝動が抑えきれずに過ごしていた。ペットショップの情報を検索したり、保護犬情報を見たり、犬との生活をあれこれ想像したりしていた。命をあずかる覚悟があるのか、ないのか、犬を迎えたら、私の生活はどのように変化するのか、明日にでも犬が我が家に来るのではないかと思うくらいに、犬との生活に想像を巡らせていた。

2020年1月、コロナがゆっくり日本を覆いつくそうとしていた。そんな中、真っ黒な毛に茶色の差し毛が入った仔犬がやって来た。鼻が著しく低くて、目がくりくりとした、所謂「ブサカワ」の仔犬である。片手にのるほどの大きさのこの仔犬は、はじめて会った時、私の顔をペロリと舐めて親愛の気持ちを示してくれた。その後、無邪気に、そして豪快に尿をたれた。その豪放な性格をとて気に入った。

この仔犬に虎麻呂と名付けて、我が家に迎えることにした。虎の斑のごとき毛並みであったことと、男の子だったことが理由だが、健康で元気に育ってほしいという願いをこめたものでもあった。我が家に迎えた夜、まるで「さびしいよー」と言っているように、声をつまらせて切なく鳴いた。環境の変化を敏感に感じていたらしく、その夜は、終止クーン、クーンと泣いた。でも、切なく鳴いたのはその夜だけだった。

万葉学者の伊藤博先生は、太郎という名の秋田犬を飼っていた。エッセイ集『患者の賦』には『『太郎』の話』がある。伊藤先生は家族みんなで太郎の教育方針を話し合い、愛情深く育てた。一貫した教育方針によって、賢く成長し、人間と心を通い合わせながら、根底のところでは家族同様の生活ができるようになったという。伊藤先生は、太郎に独特の接し方をしていた。誰もいないときは、書齋に入れ、太郎の鼻先で万葉集を吟じてやるのがそれであった。その理由を伊藤先生はエッセイでこう書いている。「犬が万葉歌を解するなど信じたわけではない。ただ、書齋で万葉歌を吟じてやれば、よその犬にはない古典的な品格がおのずから具わるのではないかと期待した」と。その期待に反して、太郎はそそくさと寝転んだり、白い眼を伊藤先生に向けたりしたという。それからまもない頃、太郎がいなくなった。家族総出で探しても、見つからなかったが、伊藤先生の脳裏には、すぐさま書齋の本棚のあいだに寝そべる太郎の姿が思い浮かんだそうだ。果たして、太郎はショッピングセンターの書店のレジの下に寝そべり、取り



巻く人にちらりちらり眼をやっていたという。

私は、虎麻呂の鳴き声を聞きながら、『『太郎』の話』を思い出していた。切なく鳴くこの仔犬に古典的な品格を育成することは容易ではないが、万葉集の本のにおいを嗅ぎ分ける能力は身につくのではないかと思った。虎麻呂を書斎に入ると、いろんなにおいがするらしく、本棚の端から順に、クンクンにおいを嗅ぎまわっている。太郎のように、本棚の間に寝そべることはしないが、リビングにいるときよりも、落ち着き払った様子でチョコンと座っている。すかさず、万葉歌を吟じてみると、書斎から、さっと出て行ってしまった。柿本人麻呂の歌を虎麻呂はどんな思いで聞いただけだろうか。万葉がわからないのであれば、琉球舞踊だと思い、仕切り直してみた。琉球古典音楽を流しながら、昔習った古典舞踊を踊ってみた。古典芸能で、古典的な品格の育成をしてみようと思ったのである。すると、虎麻呂は、すり足で歩行する私の足を噛み始めた。ぴょんと飛び跳ねて太ももに頭突きまでしてきた。「おい！お前、何してんだよ！」「早く遊ぼうよ」と言っているように感じられた。それでも、頑張っすり足で歩くと、むきになって飛び掛かってきた。優雅に踊ることなどできず、仕方なく音楽を止めた。虎麻呂に古典的な品格が具わることはないのだろうか。

伊藤先生に憧れて、こんなことをしてみたのだが、動物にはそれぞれ個性があり、一筋縄ではいかないことを痛感した。そもそも、犬にとっての古典的な品格とは何だろうか。太郎の場合、行方不明になっても、本のおいを辿れば、本棚に囲まれた伊藤先生の書斎に戻れると思っていた節がある。太郎の古典的な品格は、書斎のにおいを嗅ぎ分けるということだろう。ここに帰れば、安心できると思える場所を知っているということだろう。

うちの虎麻呂には、太郎のような品格はまだまだ具わっていない。それでも、本のおいは好きなようで、本をひらいていると、クンクン鼻を鳴らして近づいてくる。本を汚されるのは嫌だが、いっぱい嗅がせてあげよう。「これは、宇治拾遺物語のにおいだよ」、「これは、琉球漢詩のにおいだよ」。でも、虎麻呂は字が解せない、本が読めない。それにも関わらず、目は真剣そのものである。興味津々、好奇心にあふれた目をしている。「いつか、万葉集や宇治拾遺、琉球漢詩が読めるようになるといいね、虎麻呂くん」。

「電子書籍」は嫌いですか？

山口 真也

5号館 525

今年の4月から沖縄国際大学の図書館長を務めることになって、「事業計画」というものを引き継いだので読んだところ、「電子書籍の利用促進」という項目があって頭を抱えてしまった。

電子書籍のメリットは、ぱっと思いっただけでも、書架スペースをとらない、汚損・破損を防げる、貸出にかかる人的コストがかからない、来館しなくても利用できる、などがさまざまなことが挙げられる。しかし、書架スペースや汚破損の問題については、適切な除架・除籍によって棚の鮮度を保つ方に力を注いだ方が良いと思うし、貸出にかかるコストも自動貸出機の導入によって十分解消できている。電子書籍の最大のメリットとも言われる、来館しなくても利用できる、という点についても、そもそも図書館を普段から使ってないような利用者が、「さあ電子書籍が利用できますよ！」となったとたん図書館を使うようになるのかな？、という疑問もある。学生たちを見ている、レポートや宿題で図書館を普段使わずにすませている学生たちは、電子書籍を利用できるようになったとしてもやっぱりネットの情報に頼ってすませるだけで、電子書籍を使うという発想にはならないのではないか、と訝しく思ったりもする。

そもそも大学生はほぼ毎日大学に来ているのだから、(感染症が落ち着けば)来館しなくても利用できるメリットはそれほど大きくないし、スマホで図書館の本を読むよりは、空き時間に図書館に来てもらって、本を借りて(読んで)もらうついでに、静かな環境で勉強するような生活スタイルが定着した方がよい気もする。紙の本を図書館に探しに行けば、その1冊だけでなく、本棚に並んでいる、同じテーマだけれど、別の視点から書かれた本の存在に気が付くことで、自分がみている世界がぐんと広がるという経験もできるだろう。電子書籍は「再販制」の対象にならないから、タイトルによっては紙の本の5倍から10倍くらいの値段になってしまうものもある。だったら、紙の本をたくさん揃えた方が、大学生にとって教育的な効果が大きいのではないかと思うのだ。

さて、そんな愚痴をいくら書いても、すでにたくさんの電子書籍は購入済みだし、事業計画に「推進する」と書かれている



限りは利用を促進するのが館長の仕事である。食わず嫌いはよくないから、館長室で時間があるときに電子書籍を利用してみて、「これは便利」と思うことがあった。

本学で契約している電子書籍サービスは、購入していない資料も検索結果としてリストアップしてくれる。検索キーワードには、書名や著者名だけでなく、キーワード、つまり本の中に書かれている1文字1文字も含まれている。そうすると、レポート課題で「図書館の自由について」「吹抜屋台について」など、専門的な概念を調べなくてはいけない時に、そのキーワードがどの本のどのページに含まれているか、いとも簡単に調べることができるのである。もちろん、ヒットする本の全てを利用できるわけではないのだが、その本が図書館に所蔵されていれば、棚に行って該当ページを確認することができる。レポート時期には、図書館の本の争奪戦が繰り広げられるから、この機能を知っておけば、資料が足りない時に役立つし、他の人が見つけてない情報を発見して、人とはちょっと違う視点からレポートをまとめることもできるかもしれない。

電子書籍の利用促進は、まず図書館（紙の本）を普段使っている人たちから、というのがいまのところの新人館長の結論である。1年生のみなさん、図書館のハイブリッドな機能を上手に活用して、これからの4年間の大学生活を豊かなものにしてください。(2022.4.25)

☞このエッセイを読んだ人はぜひ
右のQRコードをクリック。



息子2

下地 賀代子

5号館 401

仕事柄これまでたくさんの文章を書いていて、そのほとんど全てをインターネット上の「クラウドストレージ」に保存している。ほっておくと収集がつかなくなるから時々中身を整理するのだが、ふと、2015年の『日文羅針盤』の教員エッセイに書いた原稿を見つけた。2014年に生まれた当時1歳1ヶ月の長男のことを書いていた。その後次男が誕生し、この文章を書いている2022年5月現在、彼はすでに4歳0ヶ月になっている。のちのち、長男のエッセイがあるのに自分のエッセイはないと知られたら大事である。きっと悲しい、これはいけない、と、今回は次男のことを書くことにした。

次男は2018年5月に生まれた。長男も5月生まれなので、お医者さんから出産予定日を聞いた時は、誕生会が1回ですむと心の中で喜んだ。陣痛が始まってあっという間に出てきたからせっかちなのかと思いきや、決してそんなことはなく、とてもマイペースな幼児に育っている。兄と比べてだが寝つきは良いが寝起きが悪いのも、そのマイペースさ故だろうか(就寝時間が遅いだけかもしれない。そうなると親のせいである)。一方、多良間島方言でフタピッシュ、沖縄本島方言でターチマチュー(つむじが2つあること)だからなのか、これと決めたらなかなか譲らない頑固な一面も持ち合わせている。そんな彼が時折見せる服装へのこだわりは、朝の慌ただしさが増す一因となっている。

2歳半頃からは内弁慶っぷりを発揮し、今でも、特に慣れない人(年齢問わず)がたくさんいる慣れない場所では、決して兄や親のそばから離れようとしなない。この4月に幼稚園に転園したのだが、下見をしたり兄が通園していた時の写真を見せたり、一月ほど前から対策を重ねてきたにも関わらず、入園式は兄に付き添われての入場となった。式の最中も絶対に兄の手を離さないのもそのまま兄弟並んで座り、後方の保護者席から見ると、小さな園児たちの中に兄の頭が一つ飛び出していた(先生の配慮に心から感謝である。兄のことも後でうんと褒めておいた)。こんな様子だったから、幼稚園に慣れるまでに時間がかかるのではと心配していたが、存外すぐに馴染んでくれた。最近はクラスの友達の名前まで教えてくれる。子どもの適応力には目を見張るものがある。

こう見えて言語学者の端くれの母が注目するのは、やはり



言葉である。この機に、手帳のあちこちにランダムに書き留めていたメモを探し出してみた。生後2ヶ月、笑い声が大いことに驚いている。母子手帳（親子手帳）の2歳児検診のメモ欄にも「あいかわらず声が大きくてギャギャギャ〜って笑う」と書いてあった。4歳になった今も、話す声は普通の大きさなのに笑い声は家中に響きわたる。発語はだいたい育児書や言語発達について書かれた教科書通りで、2歳になる少し前から「アッチガイ！（あっちがいい）」のような2語文が見られるようになり、気がついたら対話が成り立つようになっていた。

3歳の頃に気がついた彼の言葉の特徴はサ行とハ行の発音である。サ行は、発音の発達を目安表などにおいて4～5歳にかけて明瞭になるとされている音である。その子音[s]は音声学的に無声歯茎摩擦音と呼ばれる音で、舌先を歯茎にうんと近づけてわずかな隙間を作り、そこから息を強めに出す、というやや難しい調音方法を持つ。彼のサ行はいかにも幼児らしい発音で（「シュイトー（水筒）」など）、やっぱり歯茎摩擦音って難しいよねうんうん、と母を納得させてくれた。またハ行だが、これも目安表では3～4歳にかけて明瞭になる音とされている。まだ上手く発音できない音声に対する幼児期の対応として「置換」（サ→シャなど）や「省略」を行うことが知られているが、なんとも嬉しいことに、彼のハ行にはこの省略が認められた。しかも、単に[h]や[ɸ]の音を抜かしているのではなく、「ゴアン（ご飯、[goʔan]）」や「タッイー（タフィー（アニメのキャラ）、[taʔi:]）」などのように、母音の前にグロツタルストップ（咽頭化音）が入っているように聞こえた。今現在は「ゴハン（[gohan]）」に近い発音になっていてこの咽頭化はあまり聞こえてこない。もしかしたら、「ゴアン」（省略）から「ゴハン」（hを発音）に至る過渡の現象だったのかもしれない。「ゴアン」の段階を聞いていないのでただの想定に過ぎないが、楽しく考えさせてもらった。

メモを手がかりに記憶を手繰り寄せながらここまで書いてきたが、2015年の長男の時と比べて余裕があると我ながら感じる。時に2体の怪物と化す息子たちを相手にする日々が、母に逞しさを与えてくれたのであろう。疲労と喜びの絶えない毎日である。

「伝えることは難しい」

奥山貴之

5号館 432

相手に何かを伝えようとしているのに、それが伝わらないというのは困ったものです。でも、誰にでも「自分の言っていることはちゃんと伝わっているのかな？」と思うことや、「何度言っても分かってもらえない」ということはあるのではないのでしょうか。

どうして「伝わらない」ということになってしまうのでしょうか。こちらが分かりにくい話し方をしているかもしれません。自分が前提としていることと相手が前提としていることが異なっていることもあるでしょう。相手に話を聞く準備ができていないこともあります。

…さて、ここから話をどうもっていこうかと2、3日考えているのですが、いくつか考えは浮かぶものの、これだという感覚がなかなか得られません。このエッセイを読む学生に何を感じて欲しいのか、ポイントを絞って分かりやすく…。どうしたものかと思案しているのですが、なかなか頭の中でまとまらないのです。でも、もう締め切りがすぐそこに迫っています。仕方がない、エッセイだから少々話が散漫になってもいいだろうと、まずは書き続けることにしました。「何を伝えたいのか」が定まっていないと、伝えることは当然難しいなと感じます。

と、いうわけで、話しを続けてみましょう。日本語教師として私は、日本語学習者と日本語で話す時、相手がどれくらい日本語を使うことができるのか、今話している話題についてどれくらい知っているのか、それらを探りながら、なるべくシンプルに話すことを心がけてきました。もちろん、これは私に限らず、日本語教師ならみんなやっていることです。相手の日本語能力によっては、身振り手振りを使ったり



ちょっと大げさな表情を作ったりもしますし、写真を見せたり、他の言語を使ったりもします。こうして「伝える」ための努力をし、そして相手が「伝えようとしている」ことを理解しようと努めます。

これらのことと比べると、「相手に話を聞く準備ができていない」というのは、より難しい問題のように感じます。様々なことが絡み合ってその状態になっていることが多いからです。感情的な問題であることもあります。こういう時、分かりやすく話そうという工夫にはあまり意味がなくなってしまいます。では、どうすればいいでしょう。少なくとも相手のことを理解しようとする努力は必要です。自分のことを理解しようとしてくれる人の話しは、少しは聞こうという気になるはずだからです。

こんなことを繰り返しながら、日本語を教える仕事をしてきました。「多文化間コミュニケーション」と言う時、私が思い浮かべるのはこういうことです。そして、これは特に外国人に限ったことではなく、自分ではない誰かと話す時は、いつもそうなんだと思います。相手と自分を比べ、どうやったら伝わるかを考えるわけです。

…一応結論めいたところまで書けたような気がします。でも、やはりじっくりこない感じもします。自分の考えはまとまっているのか、どれくらいそれを言葉にできているのか、読んだ人にちゃんと伝わるのか、気にし始めるときりがありません。やはり「伝える」ことは難しいです。でも、その難しさの中に、奥深さや面白さを感じたりもします。そんなことを考えながら、このエッセイを学生のみなさんに読んでみてもらうことにします。

大学で文学を学ぶということ

村上陽子

5号館404

受講生が講義内容や教員への評価を行うアンケートの結果を、半年に一回受けとる。私が受け持つ講義のアンケートの自由記入欄には「先生はすごく文学が好きなんだなと思った」というコメントがほぼ毎回書かれている。そして、ときどき「おもしろい本を教えてください」というコメントもある。

私はたしかに文学が好きだ。しかし、「おもしろい本」を読んで文学が好きになったのかといえば、少し違うような気がする（もちろん、「おもしろい」という言葉は多義的なので、受講生のみなさんが単にエンターテインメント的なおもしろさを求めていると決めつけたいわけではない）。

私が日々読んでいるのは、端的に言えば人がむごたらしく死んでいく小説や記録文学、証言などである。これは、私の専門が原爆文学と戦後沖縄文学であることに関係している。

大学院生の頃、夏休みに『日本の原爆文学』という全集に収められた小説をひたすら読みつづける日々を過ごして、雷や花火が嫌いになった。その頃、図書館では、大きなガラス窓の近くにはなるべく近寄らないようにしていた。いま・ここに原爆が落ちてくるはずはないとわかっているのに、原爆投下前／後で様変わりしてしまった街や人々の状況を何度も読むうちに辛くなり、心や体が原爆の被害を連想するようなものから遠ざかりたがっていたのだと思う。

また、今年の春、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースを追う一方で、2015年にノーベル文学賞を受賞したスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』を読んだときの感覚も忘れがたい。飛ぶ鳥が凍って死ぬような寒さの中での戦闘。兵士がみんな死に、彼らの夕食に



なるはずだった大鍋いっぱいのスープだけが残された夜。白兵戦がはじまったときに響く、人間の骨の折れる音——。私がそれを読んだのは安全な部屋の中だった。しかし、同じ時間のウクライナでは誰かが死んでいただろう。それを想像すると、恐怖が地響きのように伝わってきた。

戦争を（あるいは災害や公害を）描いた文学というものは、時間や距離を越えて、その出来事の内部に読者を引きずりこもうとする。もちろん、完全に引きずり込まれるわけにはいかない。私たちにはいま・ここでやるべきことがあるのだから。辛いことを描いた文学は、その辛さゆえにいつでも・誰にでも受け止められるものとはならず、書架の片隅でひっそりと読者を待ち受けている。

このような文学な文学にたったひとりで向き合うことは困難かもしれない。しかし、大学の教室で読むのであればどうだろう。歴史に目を開き、ひとつひとつの表現に向き合いながら、出来事の地響きを感じ、ともに揺れる感性を磨いておくことができたなら。

私たちは、決して災害や疫病、戦争と無縁ではない。何か事が起これば、命に関わる事態にたやすく巻き込まれてしまう。この先、長く不確かな未来を生き抜こうとする学生のみなさんに、苦難に満ちた混沌を生き延びた人々からの言葉を手渡す存在であること。私は、それが教員としての自分の役割のひとつだと思っている。

とある夢について

安 志 那

9号館 605 研究室

私の覚えている限り、私はいつも物語が好きだった。それも人が話し、聞かせるものではなく、文字として書物にしたためられたものが好きだった。今思えば、読書家の母の影響が強かったと思う。母は大家族に嫁いだけばかりに、いつも家事に追われ多忙だったが、どうにか時間を見つけては本を読んでいた。幼い頃、本を読んでいて自分に構ってくれない母に寂しい思いをしたことを覚えている。それでも、私はその静寂な空気が嫌いではなかった。いつしか私も本を読むようになり、学生時代は友達との思い出より面白かった本の方が記憶に残っている。

それは、人に話す、その行為そのものに対する苦手意識のせいもあっただろう。小学校から中学、高校へと進学するまで、私はずっと読書が好きな物静かな学生で通っていた。仲のいい友人はいたし、人嫌いというわけではなかったが、人と付き合うより書物と向き合う方が好きなのは、これから先もずっと変わらないと信じていた。低血圧であるため朝が弱い私は、ベッドの横に本を山積みにし、目が覚めると同時に本を読みながら一日を始める準備をするのが習慣となっていた。

大学に入っては、学部の授業で自分がただ物語を読むのが好きなだけではなく、物語をさまざまな視座から理解することを面白いと感じることに気づいた。大学院に進み、後々は物書きになるか、翻訳家になるだろうと考えた。どの道、一生文字と書物の世界で静かに生きることになるだろう、と思ったのだ。

しかし、その後日本に留学し、日本語で博士論文を書き上



げ、韓国に帰国して母校で講義をしながら、それは随分と幼稚な思い込みに過ぎないということを、緩やかに気づかされた。博士論文を執筆する過程では、考えていることを母国語ではない言語で表現するということによるもどかしさ、苛立ち、違和感と向き合う日々だった。また、それを出版する過程は編集者と意見を交わし、自分の論文を何度も読み返し、読み返され、校正するという地獄を味わった。講義では学生たちの反応を直に感じ取り、疑問に答え、一緒に学んでいく喜びを知った。文字も物語も書物も人生さえも、一人でできることは何一つなかった。

「人文学」とは「人」に関する学問であり、物語も「人」に関するものであることに、私はやっと気が付いた。そして人と付き合う、向かい合うためには言語という媒体と、話すという行為が必要なのである。世の中に完璧な物語が存在しないように、完璧な言語も、完璧なコミュニケーションも、完璧な人間関係も存在しない。ただ今できる精一杯のことをやりながら、少しずつ進むしかないのだ。

それでも私が読んだ多くの物語、「読む」という微かな緊張を伴う体験は私の最大の資産であり、パートナーであり、故郷でもある。それを共有できるのであれば、また書物の向こうにいるさまざまな人々に少しでも興味を持ってくれれば、それ以上嬉しいことはないだろう。

大学生と読書

名城邦孝

5号館413研究室

若者の活字離れという話はよく聞くとおもいますが、今の若者がどれくらい読書しているのか皆さんは想像できるでしょうか？具体的な数字となると、なかなかイメージしにくいかもしれません。そこで今回は若者が実際にどのくらい読書しているのか、皆さん自身と同じ大学生にしぼって、ある調査から見ていきたいとおもいます。全国学生生活協同組合連合会が実施している「学生生活実態調査」では毎年大学生についての様々な調査を実施しており、その中には読書についての調査も含まれています。（ちなみにこの調査では読書以外にもいろいろなことを調べていて興味深いので、ぜひその他の調査結果も確認してみてください。）最新の2021年の調査によると、大学生の平均読書時間は1日につき28.4分だそうです。皆さん自身の読書量と比べてみていかがですか？自分はそんなに読んでいないなという人は、まずは毎日30分読書してみるのはいかがでしょうか。それが今時の平均的な大学生の読書量ということになります。大学での課題なども考えるとそれほど多くはないとは思いますが、まずは第一歩です。そのぐらいいは読んでいるという人は60分を目指してみましよう。60分以上読んでいる層が大体上位4分の1にあたります。これだけ読んでいけば、同年代の中ではいっばしの読書家と言えるとおもいます。誰もがスマホを持つ今では、一時間読書に集中するのはなかなか難しいのかもしれませんが、もう既にそれ以上読んでいる人は、今までと違ったジャンルの本を読んでみてはいかがでしょうか。本をよく読んでいる人ほど自分の好きな作家やジャンルが固定されがちになるものです。意識して今まで読んでいなかった本を手につ



てみましょう。必ず何か新しい発見があるはずです。

ちなみに、以前ニュースにもなっていたので知っている人もいるかもしれませんが、2021年の調査では1日の読書時間が「0」の割合が5割を超えてしまいました。2017年に5割を超えた後、ここ数年は減少していたのですが、また超えてしまいました。最近の大学生はやはりあまり読書をする習慣がないようです…これを聞くと、「なんだ、半分ぐらいの大学生は全く本を読まないんじゃないか！」と安心してしまってもいいかもしれません。いやいや、そこで安心せずに少しでも本を読んでみましょう。それだけでも知識や教養の面で読書をしない同年代を一步リードできるのです。ちょっと読書するだけで他の人たちと差をつけることができる、こんなに費用対効果の高い自分磨きが他にあるでしょうか？まずはこの冊子に載っている本から初めてみましょう！

日本文化学科ではAO入試・推薦入試の合格者に対して、専門領域ごとに2冊の本を選び、その感想文を書くという「入学前課題」を与えています。この課題作文は、日本文化学科教員全員で審査し、優秀作の表彰を行っています。今年度は古堅駆流さん、米須聖羅さんの2人が優秀作品に選ばれました。



2021年度 日本文化学科入学前課題作文

「身近な異文化」

(作文対象作品:『通じない日本語』窪菌晴夫 平凡社新書 2017年12月)

22AA101 古堅 駆 流

「私が面接の時に言ったことと同じだ」私がこの本を読み始めて最初に思ったことです。私は、大学の面接の時に日本語の多様性について話しました。その時は、ただ気になっていたことを話ただけで、詳しいことは大学に入学してから学ぼうと考えていました。しかし、この本は、私が考えていたことがまとめられていて、読むのがとても楽しかったです。

この本は、同じ日本語でも通じない理由やその具体例について世代差・地域差を元にして論理的に考えて解説されたものです。第一部では、世代による言葉の意味や語法の違いが生まれる理由と問題点について解説されています。第二部では、日本国内の地域による方言の違いから生まれる問題点について解説されています。

第一部第二章の「何でも略す日本語」で著者は「マクする」という単語を例に出し、中高年と若者との言葉の意味の違いについて解説されています。しかし、私はこのマクするという言葉を初めて聞きました。私の身の回りの人達も聞いた事がないと言っていました。この本が発行されたのが、二千十七年と割と近年なのに、もう若者に通じない日本語になっているのに驚きました。高校生は、マクドナルドで勉強する事が多く、友達との日常会話でもよく話題に上ります。それだけに、マクするという言葉を全く知らなかったことに驚きました。また、ペットボトルをペットと略すのかわからないという中高年の悩みにも共感しました。私も原チャで遠くの学校まで通っていたという話を聞いて、よく自転車通えたなぁと思っていました。最近、それが原動機付自転車の略語

である事を知り、納得しました。中高年にとってペットはペットであり、まさかペットボトルの略語だなんて思いもしないだろうと思いました。これが相手が疑問に思うだけだったからよかったが、短気な性格だった場合、相手を怒らせることになったかもしれない。やはり略語を使うことは、相手と場面を考えて使うようにしたいと思いました。

第一部第五章の「全然 OK」では、全然という否定表現の言葉が肯定表現の言葉と一緒に使われていると解説されています。若者は使うが中高年が使わないのは、若者にとって全然と全くの意味が同じように使われているからだといいます。私は、全然と全くに違いがある事を初めて知りました。私の身の回りの人達も肯定する時に全然を使うことが多々あります。しかし、中高年から見れば文章として違和感があり、分かりやすくいうと「ダメだいいよ」のようなどちらなのか意味が理解できない文章だということがわかりました。普段から当たり前に使っている言葉が通じないのは、中高年だけでなく、使っている側からしても違和感を感じるだろうと思いました。

第二部第二章の「味噌汁の味は『からい』か『しょっぱい』か」では地域によって、同じように感じたことでも言い方が異なることを解説しています。東京では塩辛いことをしょっぱいといい、鹿児島では単に辛いと言われているようです。この線引きは、辛いは関西、しょっぱいは関東という分け方だそうです。しかし、私は沖縄に住んでいますが、しょっぱいの方がしっくりきます。私の両親は沖縄生まれ沖縄育ちで、祖父母もそうです。どこからしょっぱいがきたのかとても不思議に思います。また、味噌汁の味が薄いと「甘い」という表現をする地域があります。この方言は九州から中国地方、四国地方、関東・甲信越から北海道など広い地域に分布されています。一方、関西地方を中心として「みずくさい」が使われ、関西や四国の一部と関東を中心に「うすい」という表現が使われています。この本によると沖縄は塩気が薄いことを甘いという地域なのですが、私は味が薄いと云います。地域による変化にも多少の違いがあることは分かりますが、なぜこのような結果になるのかよくわかりません。前にも述べたように、私の両親は沖縄生まれ沖縄育ちです。祖父母も同じで、他の地域の方言が移ることは少ないと考えられます。では、なぜ他の地域の方言が入っているのか、それはインターネットの普及によるものだと考えています。インターネットが普及する前、他の地域の方言を聞く機会は少なく、旅行や自ら学ぼうとしなければわかりませんでした。しかし、インターネットの普及により、様々な地域の方言を自然と聞くことが増えました。最近では、日本国内の方言を面白おかしく紹介する人も増えてきています。イ

ンターネットの普及により、頭が悪くなった、依存症のようだ、などと言われることが度々ありますが、その分、なにか新しいものを得ているのではないかと思います。

私がこの本を読んで分かったことは、日本語は多様性があり、自国内だけでも理解するのは難しいということです。私は将来国語教師を目指していますが、「国語は将来役に立たない」「国語面白くない」と友達によく言われます。私自身、国語が将来どのように役に立つのか具体的に説明することが出来ませんでした。しかし、通じない日本語を読んで、国語を学ぶ理由の一つを見つけてことができました。それは、「母国をもっと知るため」です。日本語は、他の言語に比べて言葉の移り変わりが早い言語です。その年に流行った言葉も、数年経てばその存在すらも忘れられてしまいます。それに、地域によって言葉の発音や意味そのものも変わります。だから、同じ日本語でも通じないことがあります。海外に目を向けることも大事ですが、その前に、まずは自国を知ることが大切だと思います。また、社会人になる時に、中高年の方々から「日本語として正しくない」と言われる事があります。確かに、今の若者が使う言葉は知らない人にとっては分かりづらく、聞きなれない言葉や、文法的に正しくないこともあります。しかし、言語というものは昔から変化しているものです。現代の人々は「いとおかし」など昔の言葉は使わないと思います。中高年が言いたいのは恐らく「正しい日本語」ではなく、「伝わりやすい日本語」だと思います。伝わりやすい日本語は聞きとりやすく、誤解を生む事ありません。確かに、仕事の場ではそのような言葉を使うことが正しいと思います。

近年では、海外の文化なども入ってきていて、言語が変化しないのは無理があります。エピローグにも書かれていますが、異なる価値観を理解することが世界平和への重要な役割を果たします。初めから異文化を全て受け入れるのは難しい事だと思います。だから、新しい形の日本語を学び、受け入れる事を異文化理解の第一歩とするべきだと思います。

前にも述べましたが、私は将来教師になりたいと考えています。現在、学校で異文化理解について学ぶことはほとんどありません。国語でも、異文化に触れていても、生徒にその実感はありません。しかし、異文化を理解する事は、様々な文化が混じりあっている現代において必須だと思います。教師になった時に、ただ教科書の内容を教えるだけではなく、その内容を学ぶ理由まで生徒に教えられるようになりたいです。



2021年度 日本文化学科入学前課題作文

「わかった」を経験する

(作文対象作品：『「わかる」ということの意味』佐伯胖 岩波書店 1995年9月)

米 須 聖 羅

皆さんにとって学校とはどんな存在だろうか。学びを得る場所、部活動に励む場所、友達との会話に夢中になれる場所と答えは様々だと思う。だが、学校を憂鬱な場所と答える子は少なからずいるだろう。日々の授業や定期テストで評価されることで、評価が低い教科だけでなく、学ぶこと自体に苦手意識を感じるようになるのだ。それは、教師が自分のことを能力のない子だと評価するかもしれないという不安から生まれるのだと『「わかる」ということの意味』を読んで知った。この本は「わかる」ということの本質を、様々な例を挙げながら探っていくものだ。

「能力は学習だけじゃない」という説明を、理解はできるが、学校は学びの場であるから学習で能力を判断するのは仕方ないと初めは考えていた。だが、それは違うことがわかった。計算しなくてもお得な方の商品がすぐにわかる買い物のベテラン主婦や、商売で損しないためにコインを数えるのが得意になったキャンディ売りの少年の例を知り、私の考えが変わった。ベテラン主婦もキャンディ売りの少年も数学が出来ないわけではない。頭の中でみんなと違うオリジナルの計算方法を編み出し、答えを出しているのだ。だから、得することも損することも無い、ただの数字同士の問題を出されると途端に答えられなくなる。

私は、小学生の頃に地域のソフトボールクラブに入り、中学、高校まで続けた。小学生の頃は深くは考えずにただバットを振り、ボールを捕り、一塁に投げるだけだったのが、中学に上がると全て自分で考えてプレーしなければいけなくなった。そこで、打撃

のコツを習う際にコーチが「芯で打つ」と説明してくれたのだが、小学校の頃のソフトボールクラブでの打撃練習の時に、軽い力でボールが飛んでいくことが何度かあったのを思い出した。あれが芯で捉えた打撃だったのかと私は「わかった」のだ。それまではコーチの教えとは違う「力の入れ方でボールの飛び方が変わる」という考えを持っていたからバットを思い切り振らない練習をしていた。だが、バットを振り回さないおかげでミート力が上がり、図らずも芯で打つことができていたのだ。そして、私は家に帰りすぐに調べた。バットの芯で打つと飛んでいくという理論がわかり、知識としても体験としても理解を深められたのだ。

また、読解力はあるが人の気持ちは察せない人や、英会話学習では優秀だが英語の文法の組み立てができない人など「わかった」のチャンスは日常生活のそこらじゅうに転がっている。自分の考えてきたことに物事の理論つまり、少し違う考えを受け入れ、結びつける。体験してきたことと「わからない」を結びつけることで新しく「わかる」。こうして理解し、納得することで新しい知識を増やす必要があるのだ。

また、次に必要なことは探求することだろう。筆者がアメリカの大学院に留学していた時に、最初の一年間は「真理を探求する」ことが全くできなかったという。ここで考えたのは、二歳から六歳頃のなんでも不思議に思え、質問が増えてくる時期「なぜなぜ期」または「質問期」のことだ。この頃は「どうしてなんだろう」と思ったらすぐに大人に聞き、探求していたが、いつからか「そういうものなんだ」と思い、深く考えることはなくなった。だが、「なぜなのか」を知ることで意識が変わり、見え方も変わるのだ。

十八歳になり、近くの自動車学校に通い始めた頃、私は運転の難しさに苦戦していた。特にカーブが苦手で、なかなかうまく曲がれなかった。ある日、教官に「ブレーキは自分がやるからハンドル操作だけに集中して良いよ」と言われ、ハンドル操作だけすることになった。すると、曲がるのが格段に上手くなった。何回か行き自信がついた頃に、全ての作業を自分でやるように言われた。だが、今度はまた曲がるのが下手になっていた。そして、教官に「君は曲がるのが下手だと思っているみたいだけどそうじゃないんだよ。ブレーキが下手なんだ」と言われた。私は意味が分からなかった。続けて「なんでカーブの前でブレーキを踏むの」と聞かれたが、すぐに答えられなかった。「そう習ったからです」と言うと笑われた。質問の正答は、「カーブは少し複雑なハンドル操作になるから、速度を落とすことで曲がりやすくするため」だった。私はそれを聞いてはっとした。ブレーキを踏むのは「決まり」だからではなく、理由があるのだと。考えてみると、停止線で止まるのも、右折するなら右に、左折するなら左に車を寄せ

るのも、徐行すべき場所があるのも全て理由があった。ブレーキをかけるのが目的ではなく、曲がりやすくするのが目的だと意識すると、カーブが全く違うものに見えた。直前で速度を落とすから曲がりにくくなっていたのを改善し、少し手前でブレーキをかけ始めることで、しっかり余裕を持って曲がることが出来た。

「なぜだろう」「どうして」「理由は」を何度も探ることで「本当は何なのか」が見えてくるのではないか。また、真理は一つだが、理由は複数個存在するのではないかと思う。そこで、ブレーキをかける場合のもう一つ考えられる例として、対向車とぶつからないためがある。ゆっくり曲がることでギリギリまで左側に寄せることができるし、見通しの悪い交差点であった場合も危険が少なくなる。こうして自分で理由を考えていくことで、真理が見つかるのだろう。

私はもうすぐ大学生になる。また、誕生日が来ると成人だ。これからは、自分に責任を持たなければならない。大学は高校までと違い、自分から学ぼうとすることが大切になる。授業を選択するのも大学からがほとんどだ。だから、「本当は何なのか」と真理を探求するのも自分で行わなければならない。そうやって学び続ける必要があるのだと思う。

教師に最も必要なものは、生徒に知識を伝える技術ではなく、生徒と一緒に学ぼうとする姿勢だろう。教師は完璧で遠い存在に思えるが、そうではない。教師と生徒の間に上下関係は無く、横並びで共に学び合う関係が正しいのだ。生徒が「わからない」問題を、教師と一緒に考えて、教師はその問題について「なぜそうなるのか」を、もう一度考える。そして、生徒に体験をしてもらうことで知識と結びつけさせる。こうしてどちらも、「わかった」となるのだ。

私は教師を目指している。これからは、生徒と学び合うこと、真理を探求することを目標にしていきたいと考えている。そして、自分から様々なことに挑戦して多くの経験を積むことで、知識と結びつけられるようにしたい。また、生徒一人一人の経験を大切に「わかった」が広がるような授業を作り、学校が学びの場であると認識しながら、楽しいと感じる子が増えて欲しいと思う。学習に苦手意識を持つ子を減らして、好きになってもらうことこそ教師の仕事だと私は思うから。

日本文化学科では1年生必修科目「リテラシー入門Ⅰ」の夏休みの課題として、本ガイドブックで紹介された本の書評執筆を課しています。この課題をもとに、沖縄国際大学図書館書評・映画評賞に応募する学生も多く、毎年日本文化学科から受賞者が出ています。2021年度は仲本陽さん、名嘉眞里歩さんが優秀賞に選ばれましたので、ご紹介します。



2021年度 沖縄国際大学図書館書評・映画評賞 優秀賞受賞 時代を映すフィクションの魅力

【参考文献】『ペッパーズ・ゴースト』伊坂幸太郎著 朝日新聞社
2021年10月

19AA077 仲 本 陽

現実とは思えないほどの苦しみに耐える生活が続く時期に本書に出会った。いつも通りの伊坂幸太郎作品ではあるが、コロナ禍を過ごす我々にとっては、苦しい日々を耐えているからこそ得られるご褒美のように感じる。

本書は2021年10月に販売された伊坂幸太郎による書下ろしの長編作品だ。主人公の壇千郷（だんちさと）は中学の国語教師で、ある条件を満たすと他人の翌日起こる出来事を少しだけ見ることができるという能力を持っている。しかし、壇は普通の先生のように生徒と関わっていた。そんなある日、壇は能力を使い里美大地という生徒を救い、そこからサークルと呼ばれる謎の団体と関わり始め、ストーリーはとある事件へと進んでいく。

これだけ見ると、いつもの伊坂幸太郎作品であるように思える。主人公が大きな問題へと巻き込まれていく話は、既に「ゴールデンスランバー」などで描かれており、主人公が特殊な能力を持っているという設定は、「魔王」などで描かれている。著者自身、「ペッパーズ・ゴースト」の公式サイトに掲載されている公式著者インタビューで、「今回は得意な部分全部乗せなんですよ。」と語っている。

しかし、私はこれまでの伊坂作品とは違う魅力が本書に感じた。それは、作中の様々な点がコロナ禍の経験を連想させるものだからである。まず、わかりやすいのは主人公の壇の能力だ。能力が発動する条件は、「飛沫による感染」となっている。相手の飛沫を浴びることで、その人の翌日を見ることができるという能力だ。インタビューによると、執筆時期とコロナウイルスが中国で流行

していた時期が重なっていることがわかる。どこで誰から感染したのかわからず、急に知らない誰かの翌日を見てしまうことに苦労していた時期もあるようだ。正にウイルスの感染に対する恐怖と重なる。壇の父もこの能力を経験しており、まだ誰も、本人すら見ていない場面を、先行的に観ることができることから「先行上映」と名付けた。壇はトラブルに巻き込まれながらも、この「先行上映」を使って問題に向き合わなければならなくなる。今の私たちには考えられないが、とある人物の翌日の情報を得る為にカラオケに誘導し、自ら飛沫を浴びる行為に出たりする。この物語の中では直接的にコロナ禍の苦しみを描くことはないが、壇は大学生の頃に三年近く世界中が麻痺状態となった「パンデミック」を経験している。「学生時代の友人たちはマスクの顔で思い出すことが多い」という言葉にはドキッとさせられる。

本書は物語の構造も特徴的で、その一つは「作中作」である。壇はとある女子生徒から、自作の小説を受け取り、本書ではその小説が物語に大きく関わってくる。猫に虐待をする動画配信を支援していた猫を地獄へ送る会、通称「ネコジゴ」。そのメンバーを成敗する二人組の「ネコジゴハンター」が主人公の物語だ。悲観的な性格で常にネットニュースをみて様々なことに対して心配している「ロシアンブル」と、正反対で楽観的な性格の「アメショー」が活躍する。アメショーは都合よく事が進むことがあったりすると「僕は、誰かが書いているお話、たとえば小説か何かの一登場人物に過ぎない、そう思うことがあるんですよ」と語る。自分を他の誰かが監視しているという感覚が、本書においては重要な意味を持つ。

もう一つ重要な存在がある。それが、「サークル」と呼ばれるグループだ。この物語では数年前に五人の男たちが店内にいた人々を巻き込み、計29人が亡くなったという悲惨な爆弾テロ「カフェ・ダイヤモンド事件」が起こった。その被害者遺族の集まりがサークルだ。この事件では犯人も命を落としているため、サークルのメンバーは怒りをぶつける対象がない。サークルと事件については、メンバーである成海彪子（なるみひょうこ）の目線で語られる。事件が起こったのが五年前の五月二十二日であることから、メディアでは「ゴー点ニーニー」と数字の並びのように言われているようで、わたしの両親のような人たちまで記号化されるように感じ、命を奪われた彼らの無念さが消えてしまうと語っている。コロナ禍では、楽しみにしていた様々なイベントや、個人での計画、伝統的な行事までもが延期、中止になる事態が頻繁に起こった。それも特定の誰かのせいではない、ウイルスのせいである。「カフェ・ダイヤモンド」という名前もあの船を思い出す。また、テレビやネットのニュースではその日の感染者数やコロナによる死者数が毎日のように数字で表されていた。

壇は、里美大地の父がこのサークルのメンバーであることから、

このグループに関わっていくことになり、壇とロシアンブルと成海の三人の目線で物語は進んでいく。ある時、壇は先行上映でサークルが怪しい計画を立てていることを知る。だが、そんな壇をサークルは監禁する。そこで助けに来てくれるのがネコジゴハンターの二人だ。サークルのメンバーは心を支えてくれる存在の羽田野（はたの）という男を飲酒運転の車に撥ねられるという形で失い、耐えられなくなり爆弾テロを起こしてその中で死ぬという計画を実行しようとしていた。更に、カフェ・ダイヤモンド事件では、犯人や警察の対応が責められていたが、事件を実況していたマイク育馬（いくま）にも問題があった。無責任に警察の動きを実況したことで犯人が焦って悲惨な結果になった可能性がある。サークルの数人のメンバーにとって育馬は唯一の怒りの対象となり、そのメンバーは育馬への復讐を計画していた。最終的に壇とネコジゴハンターと成海は、それぞれ目的は違うがそれを阻止するために協力する。

タイトルの「ペッパーズ・ゴースト」とは、映像の技術で、照明とガラスを使い、別の場所に存在するものを観客の前に映し出す手法である。壇は小説の中だと思っていたネコジゴハンターが目の前に現れた時にこの言葉を思い出す。コロナ禍でもこの言葉は当てはまる。日本で感染が広がり始めた初期、政府の発言や報道などではこのウイルスを「見えない敵」「見えない恐怖」と表現していた。しかし、すぐに終わると思っていたこの生活が想像以上に続き、時間がたつにつれ政治家や芸能人、若者の行動、国の対応と、敵は見える形に変わった。いつしか世の中は感染対策の為の行動に加え、人の目が気になり、感染が拡大する前より自分の行動が誰かに見られているという感覚が増した。そんな中で、報道されていたような身勝手な行動は許せないという気持ちもあるが、見えた敵を追い込むような世の中に恐怖を感じた。自粛期間、退屈で不満ばかりの同じような日々が続き、繰り返す緊急事態宣言、嫌なニュースばかりの毎日に本当に終わりが来るのか不安になる。しかし、本書はそんな現実にとある本を使って希望を持たせてくれる。ニーチェの「ツァラトウストラ」だ。登場人物のほとんどがこの本について、特に「永遠回帰」について語る。人間はずっと同じ人生を繰り返す。つらい目に遭い困難にぶつかった人がどれほど努力して乗り越えたとしても、またいつか同じことを味わう。本書はこれに更にニーチェの文章を引用する。『人生で魂が震えるほどの幸福があったなら、それだけで、そのために永遠の人生が必要だったんだと感ずることが出来る』と。私はこの一文で救われたと感じた。日常が戻るまでもう少し耐えてみようと思えた。

小説を含むあらゆる創作物には生を肯定する力がある。特にこの「ペッパーズ・ゴースト」では、どこまで著者が意図しているかはわからないが、コロナ禍に生きる私たちの苦しみを別の形で

描き、さらにそこに希望を見出してくれた。この経験をしてきたからこそ捉えられる物語がそこにはあり、それを読めることに喜びを感じた。本書は、これまでの伊坂幸太郎作品の魅力を詰め込みながら一時代の苦勞を反映させた非常に意味のある小説ではないだろうか。

引用：『ペッパーズ・ゴースト』公式サイト（10月29日閲覧）
https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKewi1qc70s-3zAhXYed4KHZrCCxoQtwJ6BAgGEAM&url=https%3A%2F%2Fpublications.asahi.com%2Fpeppers_ghost%2F&usg=AOvVaw0SWQy6pvcN_Vw8m7dZjrF4



2021年度 沖縄国際大学図書館書評・映画評賞 優秀賞受賞
『本と鍵の季節』からみる物事の本質について

【参考文献】『本と鍵の季節』 米澤穂信著 集英社文庫 2021年6月
21AA087 名嘉眞 里 歩

本書は、米澤穂信による図書館を舞台にした青春ミステリー小説である。持ち込まれる謎に男子高校生二人が挑んでいく全6編の物語だ。

本作は、「僕」こと堀川次郎の視点で物語が描かれる。堀川は、高校二年生で図書委員をしている。お人好みな性格のため、頼み事をされやすい。そんな堀川と出会ったのは同じ高校二年生で図書委員の松倉詩門。松倉は背が高く、顔も良く、快活でよく笑うが、妙に大人びていて、皮肉屋である。そして堀川は、松倉の事を「これが同じ高校二年生かと思うほど分別くさいことをいうかと思うと、意外に間が抜けたところがある」と評価している。そんな性格も物の見方も違う二人が、謎を解決に導いていくところが本書の一番の見所だ。

本のタイトルにあるように、「本」と「鍵」にまつわる短編の6作で構成されている。

1作目の「913」では、図書室にいる二人のもとへ突如謎が持ち込まれる。図書委員を引退した浦上麻里が、二人に「アルバイトをしないか」と話を持ち掛ける。それは「死んだ祖父遺した金庫の鍵を開けてほしい」というものだった。つまり、「開かずの金庫」の解錠である。手掛かりは祖父が生前に口にした言葉。それを頼りに、金庫の解錠方法を堀川と松倉が協力して探っていくストーリーになっている。

2作目の「ロックオンロッカー」では、図書室に謎が持ち込まれるわけではなく、二人は偶然ミステリアスな場面に遭遇する。堀川は、知り合いを紹介すると割引になる行きつけの美容院の割引券を持っていたため、堀川が松倉を誘い、一緒に散髪に行くことから始まる。「貴重品は、必ず、お手元にお持ちください」と

いう店長の言葉。その言葉と店長の不自然な接客。二人がそれらに引っ掛かりを覚えたところからミステリーが幕を開けていく。

3作目の「金曜日に彼は何をしたのか」では、テスト期間に学校の窓ガラスが割られたことにより始まる。テスト期間だったため、誰かがテストの問題を盗もうとしたと言われる。そのテスト問題を盗もうとしたと疑われたのが、図書委員の後輩植田登の兄だったのだ。植田登の兄である植田昇は、素行不良で知られている。そのため真っ先に疑われてしまう。しかし、兄の昇にはガラスを割られた日のアリバイがあるという。登は、兄の無実が証明できる証拠を一緒に探してほしいと二人に頼む。そして、小さな手掛かりをもとに証拠を探していく。

4作目の「ない本」では、堀川と松倉が、「3年生が自殺したらしい」という話を図書室でしている時に3年生の長谷川が訪ねてくる。長谷川は、自殺した香田が最後に読んでいた本を探しているという。長谷川先輩によると、香田先輩は本が好きで、自殺をする何日前にある本を読んでいたらしい。さらに便箋みたいなものとシャーペンが机に置いてあり、その便箋を読んでいる本に挟んだように見えたそう。長谷川先輩はその便箋が香田先輩の遺書なのではないかと考え、その本を二人に探してほしいと頼む。長谷川先輩の記憶を頼りに最後に読んでいた本を見つけだすために二人が奮闘する。

5作目の「昔話を聞かせておくれよ」では、放課後の図書室で雑務に勤しんでいた堀川に、新聞を読んでいた松倉が「昔話をしよう」と持ち掛ける。テーマは「宝探し」。先攻の堀川は、小さい頃のプールでの苦い思い出を話す。後攻の松倉が話出したのは、6年前に起きたある自営業者と泥棒の話、それからその後日談だった。松倉の話は、昔話と言いながら、今に繋がる話でもあった。6年越しの「宝探し」。堀川は、松倉のまだ終わっていない「宝探し」を手伝う。ただの暇つぶしで始めた「昔話」が、謎へと変わっていく。5作目は、松倉の過去と考え方がよくわかる話になっており、物語の最高潮の回であると言える。その分、他の回よりも分量が多くなっている。

6作目の「友よ知るなかれ」は、5作目の「昔話を聞かせておくれよ」と繋がっている話である。堀川と松倉のものの見方、考え方の違いがわかる回である。6年越しの「宝探し」をする中で二人の意外な苦悩。そして、6作目では今まで以上に二人の友情関係に注目していただきたい。

本書の見所は3つある。見所の一つ目は、堀川と松倉の友情関係である。お人好しで何事も信じて疑わない堀川とすぐに疑うことから入ってしまう松倉という正反対のキャラクターを登場させている本書。一人だけでは解けない謎をものの見方、考え方が違う二人がそれぞれの視点で謎を見る事で解決に導くことができる。お互いがお互いをカバーしあうことで謎が解けるダブル探偵

制という珍しい形を取っているため、謎を解いていく過程が面白く、目が離せない。仲は悪くないが、特別仲が良いわけではなく何かのきっかけで関係性が壊れてしまいそうな距離感を保つ二人。近すぎず、遠すぎずのほどよい距離感を保つ二人の関係性は、謎を解いていく事で深まっていく。しかし、二人の関係性は、5作目と6作目で少し不穏な空気になる。青春時代特有の絶妙な空気間が表れている。本書は、二人の友情関係自体が一つの大きなミステリーになっていると言ってもいいだろう。2人の関係性にぜひ注目していただきたい。

見所の二つ目は、堀川と松倉の会話である。そのテンポとノリの良さに驚かれるだろう。頭の良さを感じさせる言葉選び、軽妙なトーク。読んでいて心地が良い。クスッと笑えるような会話と推理をする時の真剣な会話とのギャップも読み応えがある。謎解きだけに注目するのではなく、二人の会話に注目することで謎解きの息抜きや青春小説の色を強めてくれるだろう。

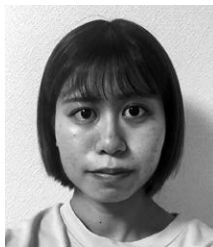
見所の三つ目は、何と言ってもやはり、ミステリー小説ならではの、ミステリーとしての面白さである。伏線が少しずつ散りばめられており、その伏線一つ一つが謎を解決していく鍵となる。それらを見逃してはならない。紐解かれていく謎に読者のあなたは引き込まれるだろう。さらに、本書は高校2年生の堀川の視点で描かれているため、読みやすく、ミステリー初心者やミステリーに苦手意識のある人でも本の世界に入り込みやすいことも特徴だ。また、短編集のため、伏線がすぐに回収される点においても読みやすい。巧みな技によって予想できない展開を生み出す米澤穂信は、我々読者の期待を裏切らない。

予想もできない展開で今まで信じていたことが覆される本書。そこから学べることは、物事の本質は、自分が見てきたものが全てではないということである。物事の表面だけに注目するのではなく、何が本質なのかを見極める必要がある。つまり、物事は、一つの視点から見るとはならず、様々な側面から物事を見て判断するべきということである。そのためには、思い込みや先入観に捉われずに物事を見た方がよいだろう。それは、日常生活でもいえるのではないだろうか。例えば、目の前にある情報を一つの角度からしか見ず、他の情報を取り入れずに、目の前にある情報だけが真実だと思いつくことは、物事の本質を見極めることができない。そこで、本書は様々な側面から物事を見て何が本質かを見極める必要があることを教えてくれる。

本書は、ミステリー好きはもちろん、青春小説好きの方でも読みやすい一冊となっている。

さて、ここまで私は、本書の書評を書いているが、それが本当か、もしかしたら自分の信じていたものが覆るかもしれない。本書を手に取り、その本質を自分自身の目で確かめていただきたい。

日本文化学科では、大学生に求められるライティングスキルを高めるため、2年生前期必修科目「アカデミック・ライティング」において、夏休みの宿題として「テキスト分析」をテーマとするレポートの作成を2年生全員に課しています。このレポートは「アカデミック・ライティング」担当者が審査し、2年生後期必修科目「ゼミナール入門」内で優秀賞受賞者の報告会を開催しています。



2021年度の最優秀賞は何盛英恵さん、平敷魁里さんに決定しました。何盛さんのレポートをここでご紹介します。

2021年度 日本文化学科2年生最優秀レポート

テキストに出現する「い抜き言葉」の変化 ～邦楽の歌詞のヒットソングを対象として～

20AA091 何盛英恵

1. はじめに

筆者は「日本語文法論Ⅰ」において、「ら抜き言葉」について学習した。そして、「ら抜き言葉」と似たような「い抜き言葉」という現象もあることを知った。一般動詞や力行変格活用の動詞の「ar」という要素が抜け落ちでできた「ら抜き言葉」に対して、「話してる」など本来「い」を入れる部分に「い」を省いて使用される言葉が「い抜き言葉」である。本来であればこれは正しい日本語ではないが、私たちは日常会話でこのような表現をすることが多いのではないだろうか。そして、このような表現はいつから生まれてきたのだろうか。

本レポートでは、「い抜き言葉」の年代別による使用率の変化を明らかにするために、「年代が進むにつれてい抜き言葉の使用率が増加する」という仮説をのり下で、1950年～2010年の10年ごとのヒット曲のうち10曲を対象として、歌詞に出てくるい抜き言葉の使用率の調査を実施することにした。

本レポートの構成は次の通りである。まず、第2章において調査概要を述べ、第3章において調査結果とそれに対する考察を行う。そして第6章において、結論をまとめつつ、今後の課題について述べていく。

2. 調査の概要

○調査の種類

邦楽のヒット曲の歌詞から年代別の「い抜き言葉」の使用率の調査を行う。

○調査の対象

1950年～2020年までの曲の歌詞を対象として調査する。調査対象の年代を10年ごとに区切り、「レコチョク」(音楽サイト)を参考にヒットした曲を年代ごとに約10曲ずつ調査し、歌詞に出てくる「い抜き言葉」の使用率を比較する。

○調査の項目

- ① 1950年代などの古い年代の曲の歌詞に関してはまだ「い抜き言葉」はあまり出てこないのではないかな？
- ② 年代が進むにつれて「い抜き言葉」の使用率は増加するのではないかな？
- ③ 同一作詞者の場合では年代が変わっても「い抜き言葉」の使用率は変化しないのではないかな？

3. 調査結果と考察

3.1 調査結果

まず、調査結果について述べる。

年代ごとのヒット曲の歌詞に出てくる「い抜き言葉」の数は以下のようなになる。

また、「い抜き言葉」の使用率を求めるために「い」を省かずに使用している言葉に関しては「～ている」型として表している。

○1950年代(表1)

発表年	タイトル	作詞	い抜き	～ている
1950	東京キッド	藤浦洸	0	0
1950	買い物ブギー	村雨まさを	0	0
1950	あざみの歌	伊藤久男	0	0
1951	ひばりの花売娘	藤浦洸	0	0
1952	りんご追分	小沢不二夫	0	0
1952	お祭りマンボウ	原六朗	1	1
1953	街のサンドイッチマン	宮川哲夫	0	1
1957	喜びも悲しみも幾歳月	若山彰	0	0
1958	夕焼けトンビ	三橋美智子	0	0
1959	夜霧に消えたチャコ	宮川哲夫	0	1
		合計	1	3
		使用率	25%	

○1960年代（表2）

発表年	タイトル	作詞	い抜き	~ている
1960	見上げてごらん夜の星を	永六輔	4	0
1960	アカシアの雨がやむとき	水木かおる	1	1
1962	ふりむかないで	池田友彦	0	4
1963	明日があるさ	青島幸男	1	1
1964	柔	関沢新一	0	1
1967	ブルー・シャトウ	橋本淳	0	1
1967	夜霧よ今夜もありがとう	浜口庫之助	0	2
1968	好きになった人	白鳥長詠	1	2
1969	白いブランコ	小平なほみ	0	3
1969	ドリフのズンドコ節	なかにし礼	1	1
		合計	8	16
		使用率	33%	

○1970年代（表3）

発表年	タイトル	作詞	い抜き	~ている
1972	傘がない	井上陽子	1	2
1978	カメレオン・アーミー	阿久悠	0	4
1978	透明人間	阿久悠	0	2
1978	ジョニーの小唄	谷村新司	0	3
1979	銀河鉄道999	山川啓介	0	1
1979	異邦人	久米小百合	1	4
1979	窓	松山千春	1	2
1979	カサブランカ・ダンディ	阿久悠	0	2
1979	魅せられて	阿木曜子	2	1
1976	ファンタジー	阿久悠	2	3
		合計	7	24
		使用率	23%	

○1980年代（表4）

発表年	タイトル	作詞	い抜き	~ている
1980	異邦人	久保田早紀	1	2
1983	待つわ	岡村孝子	0	0
1986	恋のロープをほどかないで	秋元康	2	3
1987	木枯らしに抱かれて	高見沢俊彦	2	0
1988	Runner	サンプラザ中野	3	1
1988	いつか何処かで	桑田圭佑	2	1
1988	あなたを愛したい	田口俊	2	1
1989	とんぼ	長渕剛	1	0
1989	嵐の素顔	三浦徳子	1	1
1989	シングル・アゲイン	竹内まりや	3	1
		合計	16	8
		使用率	67%	

○ 1990年代 (表5)

発表年	タイトル	作詞	い抜き	~ている
1996	恋心	織田哲郎	4	2
1996	Your my sunshine	小室哲哉	6	2
1996	チェリー	草野正宗	3	0
1998	終わりなき旅	桜井和寿	6	3
1998	夜空ノムコウ	スガシカオ	2	3
1999	A・RA・SHI	J & T	8	0
1999	First Love	宇多田ヒカル	3	0
1999	Boys & Girls	浜崎あゆみ	3	3
1969	白いブランコ	小平なほみ	0	3
1969	ドリフのズンドコ節	なかにし礼	1	1
		合計	35	13
		使用率	73%	

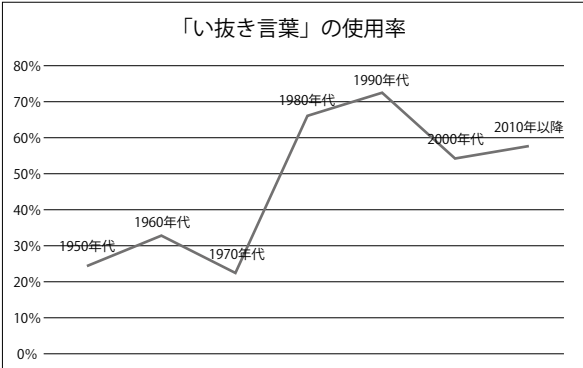
○ 2000年代 (表6)

発表年	タイトル	作詞	い抜き	~ている
2005	粉雪	藤巻亮太	3	1
2006	三日月	綾香	4	7
2007	Happiness	ワンダーランド	6	0
2007	蒼く優しく	小淵健太郎	3	3
2007	FREAKY	倅田來未	2	1
2008	ORION	百田瑠衣	1	6
2008	時の足音	小淵健太郎	4	1
2008	キセキ	GReeeeN	3	3
2008	HANABI	桜井和寿	5	5
2008	そばにいるね	青山テルマ	10	7
		合計	41	34
		使用率	55%	

○ 2010年代以降 (表7)

発表年	タイトル	作詞	い抜き	~ている
2011	フライングゲット	秋元康	2	0
2013	さよならクロール	秋元康	3	0
2015	Sakura	eltvo	3	1
2015	クリスマスソング	清水依与史	5	1
2016	海の声	藤原誠	3	0
2018	Lemon	米須玄師	2	4
2018	シンデレラガール	河田総一郎	2	0
2018	マリーゴールド	あいみょん	3	2
2018	点描の唄	大森元貴	0	5
2019	夜に駆ける	Ayase	3	6
		合計	26	19
		使用率	58%	

(図1)



1950年代～1970年代までは「い抜き言葉」の使用はみられるが20～30%と、い抜き言葉の使用率は低い。1970年代までは「～ている」の方が「い抜き言葉」より多く使用されていたが、1980年代に入るとい抜き言葉の数が「～ている」型の言葉の数よりも増加し、い抜き言葉の使用率は67%と急増している。その後も1980～2010年代以降は、い抜き言葉の使用率は過半数を超えている。

3.2 考察

表1から、1950年代はそもそも「～ている」型の表現が非常に少なく、それに伴い「い抜き言葉」もあまり見られなかった。表1で示した曲の歌詞以外にも、本当に「い抜き言葉」が使用されている曲はないのか調査したが、見つけることができなかった。このことから、1950年代の時点では現在と比べまだ「～ている」という表現自体あまり使用されていなかったため、「い抜き言葉」もあまり広まっていなかったのではないかと考えられる。加えて、「い抜き言葉」だけでなく「～ている」という表現も年代を重ねるごとに増加しているということも確認することができる。

図1のグラフからも分かるように、「い抜き言葉」の使用率が大きく増えたのが1980年代である。しかし現在に至るまで、全ての「～ている」型が「い抜き言葉」になってしまったのではなく、1つの曲の歌詞の中にも「～ている」型と「い抜き言葉」を混ぜ合わせながら表現している作品も多くあった。

以上のことから、①1950年代などの古い年代の曲の歌詞に関してはまだ「い抜き言葉」はあまり出てこないのではないかと②年代が進むにつれて「い抜き言葉」の使用率は増加するのではないかとという仮説は証明された。しかし、③同一作詞者の場合で

は年代が変わっても「い抜き言葉」の使用率は変化しないのではないか？という仮説は今回では調べることができなかった。

4. 結論・今後の課題

本レポートでは、時代の流れによる「い抜き言葉」の使用率の変化について明らかにするため、年代ごとのヒット曲の歌詞に使用される言葉の調査を実施した。

調査の結果、「い抜き言葉」の使用率は年代を重ねるごとに増加していることが分かった。このことから、当初の仮説が証明されたと考えてよいだろう。また、「い抜き言葉」の増加に伴って「～ている」という表現方法も増加しているということが確認できた。仮説③の同一作詞者の場合では年代が変わっても「い抜き言葉」の使用率は変化しないのではないか？という問いは、今回では調べきれなかったので次の課題である。

今回の調査はあくまでもヒット曲の歌詞に使われる「い抜き言葉」の調査をしたものであり、実際の日常会話などでの使用率は把握できていない。今後は、曲の歌詞以外にも、マンガや雑誌、普段の日常会話など様々な視点から「い抜き言葉」の使用率の変化についてさらに明らかにしていきたい。

参考文献

- ・1950年代～2020年代までのヒット曲 レコチョコ
- 【レコチョコ】1950～1960年代ヒット曲 (recochoku.jp)



2021年度 日本文化学科2年生最優秀レポート 「あたかも」から考える教材価値

20AA098 平 識 魁 里

1. 教材価値の定義

教材価値とは、使用する教材から、生徒たちが何を学べ、教員側が何を教えることができるのかを見出すこと、生徒たちが自由に議論し、自身の考えを深めることができる価値である。その際に教員が留意することは、教材と向き合い、その本質を研究してから、教材価値を見出すことである。それだけでなく、子どもの発達の段階に合わせて、『この学年で指導すべき内容』が示されている学習指導要領の指導事項との関連を押さえて、何を教えるのかを考えていくことも大切である。

2. 「星の花が降るころ」の教材価値

2-1. 「星の花が降るころ」で大切なところ

教材価値を考える前に、今回の教材において大事な箇所がいくつか存在するので説明していく。一つ目は、初めの段落に登場し、最後の結びにも関わってくる「銀木屋」である。タイトルが「星の花が降るころに」とあるので、白く小さな形をしている「銀木屋」は、「私」の寝所変化に関わってくる重要なキーワードであることが分かる。二つ目は、夏実との関係性である。去年の秋は、銀木屋の木の真下で二人は笑い合っていたが、些細なきっかけでお互い離れ離れになってしまった。思春期によく起こり易い友情関係の変化は、今回の教材を読む際に、最も感じ取りやすい部分であり、多様な視点から考えることができる。三つ目は、「あたかも」という言葉が導く「私」と戸部君の関係性である。最初に登場した「あたかも」で戸部君に対して「私」が持つ印象を導き、戸部君よりも夏実との関係修復に頭がいっぱいであり、戸部君が「私」の心情変化に関わってこないと思わせている。しかし、二回目に

登場した「あたかも」という言葉を用いて作った文章により、落ち込んでいる「私」に笑顔を与え、「私」にとって戸部君が欠かせない存在であるということを示す役割をしていることが読み取れる。

2-2. 星の花が降るころという教材の本質（2-1の大事なことの中에서도特に重要視したいこと）

2-2-1. 三つの候補のうち重要視したいこと。

- 候補1 銀木犀
- 候補2 夏実との関係性
- 候補3 「あたかも」という言葉が導く「私」と戸部君の関係性

「星の花が降るころ」の単元において最も大事なところは、上記の候補3つのうちどれだろうか。それは、候補3の「あたかも」という言葉が導く「私」と戸部君の関係性である。候補3が最も重要な理由は、銀木犀と「私」の関係も夏実との関係性も「あたかも」という言葉が導く「私」の心情変化によって明らかにすることができるからである。

重要視するべきところが分かったところで、名前付きの登場人物が持つ役割について定義しておく。名前付きの登場人物は、主人公の心情変化に関係してくる。だから、戸部君は「私」の心情変化に関わってくる人物である。その定義を基に考えていく。

2-2-2. 最初の「あたかも」(p.107)の前後で読み取れる、「私」の戸部君に対する印象、「私」の心情について。

「私」は戸部君に対して、「あたかも」という答えと掛けて、「わかんない」と表現している。しかし、小学生の頃から一緒だった二人は、お互いの得意・不得意ぐらいは把握しているに違いない。だから、戸部君は「私」が文章作成を得意だと知っているため話しかけたのである。「私」の方も、問題の答えも、戸部君がどんな人かも分からないはずがない。しかし、「わかんないよ。そんなの自分で考えなよ。」と冷たく返している。どうして冷たく返したのか。それは、「私」の心情が夏実との関係性修復に向かっているからである。些細なきっかけで離れ離れになってしまった夏実と仲直りしたいことが「あたかも」の後より分かるので、戸部君が話しかける前も「夏実」のことを考えていたに違いない。冷たく返したのは、戸部君に対してマイナスの感情があったから

ではない。「夏実」のことを考えていて、戸部君のことにまで目がいかなかったからである。

最初の「あたかも」が導いている「私」と戸部君の関係性を一言で表現するならば、「一方通行」であり、「私」は夏実との関係修復に夢中になっているので、そこから友人関係の悩みは、周りが見えなくなるほど一人で抱え込んでしまうという特徴を読み取ることができる。

2-2-3. 「あたかも」(p.111)の前後で読み取れる、戸部君の心情と「私」の心情、最初の「あたかも」に比べての私の心情の変化について。

戸部君が「あたかも」を使って「私」を笑わせたのはどうしてだろうか。それは、落ち込んでいる「私」を励ますためである。前述では、「私」と戸部君の関係性を「一方通行」と表現したが、これは「私」視点であるため、戸部君にとって「私」は、特別な存在であるに違いない。だから「私」の得意分野も分かり、いつもと様子が違うことも見抜くことができる。文中には、「私」視点ではあるが、夏実と話せず、ひどい顔をしている「私」を戸部君が見ていたことが書かれている。その「私」を心配して、声をかけて励ますことで、「私」に自身の存在と大切さを強調しているのである。「私」の方は、「あたかも」以前に戸部君がボールを磨く姿を目撃し、過去に言っていた戸部君のボールに対する考え方から、自身が考えていたことが小さく、くだらないことに気付かされている。「あたかも」以後では、戸部君の身長の変化やお互いに笑い合っている場面から戸部君との関係性が「一方通行」ではなく、「私」を励まし、理解してくれている「特別な存在」へと変化していることが読み取れる。戸部君と「私」は、「あたかも」を通して、お互いに良い影響を与えてくれている存在だということを認識している。そして、その後の銀木犀の場面で、夏実との仲直りを諦めず、プラスの気持ちで捉えていることは、「あたかも」前後が導く、「私」の心情変化が関わっているとと言える。

2-3. この教材の本質について

本質を考える前に、本質を定義しておく。本質とは、その物事なしには存在できない要素のことであり、教材における本質の考え方は、内容の中心となるキーワードのことである。そのうえで、考えられる本質は、前述で述べてきた「あたかも」というキーワードである。「あたかも」というキーワードは、「私」と戸部君の関係性や心情変化、「銀木犀」がもたらす「私」と夏実の思い出と「私」の夏実に対する心情を最大限に引き出す大きな役割を担っている。教材価値も「あたかも」というキーワードを踏まえなが

ら考えていく。

2-4. どのような教材価値が考えられるのか。

教材価値を考えるうえで大切なことは、冒頭部分で定義した通り、生徒側と教員側にメリットが存在し、生徒たちが自由に活発に議論し、考えを深めることができるのかということである。今回は、六つの視点から、教材価値を考えていく。

①今回のタイトルである「星の花が降るころに」から、どのような内容なのかを予想する。

期待できる効果：決められた内容、決められた条件では、良い考えが中々思いつかないことが多い。しかし、タイトルだけという単純な条件で正解がない場合は、自由な発想と自由な考えができるため、教員側が想定していなかった考えや、今回の教材を紐解くキーワードが出てきたりする可能性がある。生徒側にとっても、楽しみながら取り組みことができるだけでなく、次回以降の授業から触れる内容に入りやすくなる。教員側としても中学一年生がどのような考えを持っているのかの一つの指針となるため、今後の授業計画を立てるヒントにもなる。

②「銀木犀」について調べ、今回の内容とどのように関わっているのかを考える。

期待できる効果：日常で生活している中で「銀木犀」という言葉聞く機会が少ない。「銀木犀」の特徴や持っている花言葉を調べることで、「銀木犀」が今回の教材においてどのように関係しているのかが見えてくる。それだけでなく、「銀木犀」が持つ花言葉の一種である「初恋」は、思春期に入る中学一年生という学年にとって難しい感情の一つでもあるため、「初恋」についても考える良い機会ともなる。

③「あたかも」が導く、「私」と戸部君の関係性、「私」の心情変化について考える。

期待できる効果：今回の教材のキーワードは「あたかも」である。「あたかも」の意味は、「あるものが他によく似ていること」であり、比較をするときに用いる副詞である。副詞は、ほかの言葉と結びつくことで自身の役割を果たすが、今回の教材では、「あたかも」という言葉だけで心情変化を比較するキーワードとして機能させている。「あたかも」という言葉が、より一層輝く教材であることを認識する必要がある。日常会話ではあまり使うことのない「あたかも」を用いて文章を作成することで、語彙力を身につける機会が設けられる。また、戸部君の気持ちと「私」の気

持ちを整理して、関係性を整理しやすい箇所でもある。二人の間に生まれた「特別な感情」などについて自由に議論し、自身が持っている考えと比較し、様々な考えを吸収することが期待できる。

④戸部君視点から内容を考えていく。

期待できる効果：今回の教材は「私」視点で書かれているため、戸部君の印象や心情も「私」視点から書かれている。だから、戸部君視点という異なった視点から内容を見ていくことで、戸部君の新しい一面に気が付き、「私」の心情変化を客観的に整理することも可能となる。戸部君視点は、正解がなく、考えることは難しいが、教員側がある程度の方向性を示せば、活発な意見交換が期待でき、生徒たちの考えの幅を広げることができる。教員側にとっても、難しい心情整理を違う視点から考えさせることができるので、授業をスムーズに進行することができる。

⑤友達とは何なのか。自分なりの定義を作ってみる。

期待できる効果：今回の教材では、「私」と戸部君と夏実という三人の人物が登場する。「私」と夏実は友達で「私」と戸部君は友達であるということが読み取れるが、「私」と夏実の関係は上手くいっていない。これから「私」と夏実の関係を修復するためにはどうしたらよいのかというテーマを設定して考える時間を設けてみるのも面白いのではないだろうか。思春期は友人関係の悩みも現れる。その思春期に突入する時期に「友達」について考えることができるのは生徒たちにとって良い機会となる。自身なりの「友達」の定義を考え、「私」と夏実と戸部君の関係性に当てはめることで、より今回の教材が理解しやすくなる。

⑥「私」のその後。自由に想像して考えてみる。

期待できる効果：どの物語にも終わりが存在する。終わった後で「私」のその後を予想することも学びを深めるうえで欠かせないことである。自身の考えの根拠を教材の内容を通して掴み、把握する訓練にもなる。受け身ではなく、主体的な態度が学ぶことにとって大事である。だから、常に自身の考えと根拠を持つことは、主体的に学ぶことにつながるのである。

3. 学習者の実態

3-1. 学習指導要領の「教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表（小・中学校国語科）」の内容の要約と中学一年生が身につけるべき力について。

中学生の国語に対する課題はいくつかあるが、その中でも、「伝

えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすること、「複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること」に関しての課題を改善することが重要である。そのために必要な能力を、中学一年生という学年に注目して、学習指導要領を参照し、考えていく。

どのような能力が必要なのか。

- 話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすること。
- 文章の中心的な部分と付加的な部分事実と意見との関係などについて叙述を基に捉え、要旨を把握すること。
- 場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉えること。
- 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること。
- 話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること。
- 目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。
- 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。

中学一年生でも様々な能力が必要だが、その中でも特に最重要視すべきことは、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。」であると考える。教材理解は、その教材を理解し、問題を解き、正解するだけではない。理解したことを基に自分の考えを形成し、後の自分の考えの選択肢を広げることである。

3-2. 教科書冒頭の学習目標

「場面や描写を結び付けて読み、印象に残った部分を語り合おう。」

この学習目標は、中学一年生の生徒たちに何を求めているのか。場面や描写を結び付けて読むということは、教材を因果関係や登場人物の相互関係、心情変化を理解しながら読むということである。語り合うということは、教材を理解し、日常生活の中の情報も取り入れながら自分の考えを整理して、話すということである。だから、前述したように、「その教材を理解し、問題を解き、正解するだけではない。理解したことを基に自分の考えを形成し、後の自分の考えの選択肢を広げること」がより一層大切だということが学習目標にも表れている。

3-3. 五月上旬ごろの中学一年生の心の状態

中学一年生の五月は、四月に比べ、周りとの関係性や環境に慣れ、自分自身に余裕が出てくる。自分自身に余裕が出てくることで、ピアジェの四つの発達段階のうちの「形式的操作期」が始まる時期でもある。形式的操作期とは、抽象的な知識や概念が理解できるようになってくることである。今までのように自らの経験だけでなく、想定した判断をもとに論理的に結果を考えることができるようになる。そのほかにも、喜怒哀楽の様々な感情を表現でき、相手の気持ちも理解できることや自分自身の「個性」に気付き、その個性を生かせる「適材適所」を探し始める時期でもある。友人関係や環境、コミュニケーションで悩み始め、様々な葛藤を抱える時期でもある。要するに五月ごろの中学一年生は、成長のために自分なりに考え、実行し、悩み、苦しみ、周りの状況や環境に敏感な時期であるということが言える。ベネッセの学力調査より中学生の学習の悩みに「やる気が起きない」「集中力が続かない」などがある。その中でも中学一年生は、小学校の頃に比べ学習量も内容も増えるため、ほかの学年に比べたら、そのような悩みを持つ人も多いと考えられる。

3-4. 中学一年生がこの教材をやる意義

中学一年生は、前述した通り、「成長のために自分なりに考え、実行し、悩み、苦しみ、周りの状況や環境に敏感な時期」である。そして、今回の教材は、「私」が友達の関係で悩んだり、戸部君との関係性が変化する前触れを感じられたりこれから思春期が本格的に始まる中学一年生にとっては考えるのが難しく、理解も難しい。他の学年に比べて、思春期の特徴の経験が浅い分、自分なりの答えも見えてこないかもしれない。しかし、思春期の準備段階として、難しい友人関係について考え、友達の大事さについて改めて理解することは大事である。今回の教材は、「友達」について、「私」や戸部君の心情変化から考え、自分なりの答えを持つ機会を作ってくれようとする。

3-5. 学習者の実態（上記4つの内容を踏まえ、どのような教材価値が大きな効果を発揮するのかを考えていく。）

教材価値を六つ考えてきたが、中学一年生の学習実態を踏まえると、どの教材価値が大きな効果を発揮するだろうか。中学一年生で身につけるべき能力はたくさんあるが、その中でも「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする」ということが大事だと前述した。それを踏まえて考えると、

③「あたかも」が導く、「私」と戸部君の関係性、「私」の心情変化について考える。

④戸部君視点から内容を考えていく。

⑤友達とは何なのか。自分なりの定義を作ってみる。

⑥「私」のその後。自由に想像して考えてみる。

の四つは大きな効果を発揮することができる。この四つの共通点は、一度教材を読み理解する必要があるということである。そして、それを基に、整理し、自分の考えにしていくことが求められる。特に⑤と⑥は、日常生活や今までの経験も活用しながら自分の考えを持つことが求められるため、相手の考えを聞き、自分の考えの選択肢を広げる良い機会となる。中学一年生は、授業や自主学習の面において、小学生とは異なるやり方、環境に対して悩みを持つ人が多い。特に、授業時間が45分から50分に増えるため、集中力の維持は難しい。だから、グループワークなどを多く取り入れながら、自分自身の意見をグループの仲間と共有できる機会を増やすことで、楽しく、集中力も維持しながら、⑤と⑥の教材価値の効果を高めることができる。

3-6. GIGA スクール構想によってIPADが普及しているが、それを利用すると考えた時、この教材の価値はどのようになるのか。またどのように利用すると更なる効果が発揮できるのかを考えてみる。

GIGA スクール構想とは、2019年12月に文部科学省から発表されたプロジェクトであり、小学校の児童、中学校の生徒一人に一台のPCと全国の学校に高速大容量の通信ネットワークを整備し、多様な子どもたちに最適化された創造性を育む教育を実現する構想である。コロナウィルス感染拡大の影響でオンライン化が急速し、沖縄の小中学生にも一人一台のiPadが渡されている。現状は、「ロイロノート」というアプリでやり取りしていて、不便な面も多いが、今後はさらに発展していくことが見込まれる。それだけでなく、教科書もデジタル化し、紙の教科書がいない時代がもう目の前まで来ている。

iPadを使って授業を進めていくと仮定した場合どのような教材価値が大きく効果を発揮するだろうか。GIGA スクール構想のメリットとデメリットを踏まえながら考えていく。メリットは、授業の幅が広がること、生徒同士や教員と生徒間の情報共有がスムーズになること、教師側の情報管理が楽になることなどが挙げられる。デメリットは、手書きの機会が失われること、SNSのトラブル等に巻き込まれる可能性が高くなること、情報が多いため間違った情報を信じ込んでしまうことなどが挙げられる。だから、

大きな効果を期待できる教材価値の条件として、「共有」ができ、iPadを通して手書きの機会を確保、つまり自分自身の意見を整理すること、今までとは違った授業の形態ができることが大事である。先に、今までとは違う授業の形態について例を出すと、二クラスで同じテーマについて考え、議論することでクラス対抗の討論会や意見交換なども可能になることが挙げられる。大規模だが、生徒達にとっては面白い授業になる機会となる可能性がある。それを基に考えると、⑥の『私』のその後。自由に想像して考えてみる。」の教育価値はさらに大きな効果が期待できる。「私」のその後は、教材には書いていないため、教材を理解したうえで、自由に自分自身の考えを作ることができる。また、自分とは違う考えの人とすぐ意見を共有でき、席が少し遠い人でもチャットなどを通して意見も交換できるため、授業の効率性も上がる。更に、「私」のその後を、短い時間で他のクラスとも共有できるようになるため、自分たちのクラスでは出なかったような考え方を知ることができる。そして、その考え方から、新しい考えを導いたり、更にその考えに違う要素を足したりして、大きな一つの考えとすることもできる。大人数でも有意義な授業となる可能性を秘めている。

4. 結論

改めて、教材価値の定義を確認する。教材価値とは、「使用する教材から、生徒たちが何を学べ、教員側が何を教えることができるのかを見出すこと、生徒たちが自由に議論し、自身の考えを深めることができる価値」である。教育目標にもあるように、生徒が教材を理解したうえで、自主的に考えを持つことが求められている。六つの教材価値は、自分自身の考えを持つことに重点を置いているため、中学一年生の生徒が授業に対して受け身にならず、自主的に取り組む機会を作ることができる。中学生が国語の授業を受けることの重要性は、語彙力や読解力を身につけ、自分自身の考えをしっかりと文章化できるようにすることである。自分自身の考えをまとめ、文章化することができなければ、高校生、大学生になっても苦戦していく。自分自身の考えをしっかりと持つということは、自分自身を形成することにつながる。中学生の「国語」は、自分自身を形成するためのスタートとすることができる。教材の向き合い方として大事なことは、どの教材に対しても自分の考えを持ち、選択肢を広げるきっかけを持つことである。これには教師側の協力も必要である。教師側が、様々な視点から、CICA スクール構想の将来も見据え工夫していくことが求められる。教材価値は、注目する視点を変えるだけで、たくさん考えることができる。その中で、生徒の状況などを踏まえながら適切な

教育価値を考え、実行することが重要である。

参考文献

https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/hamada_ec/kenkyu/kiyou_houkoku/jyugyou.data/q4.pdf
(2021/8/17)

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E6%9C%AC%E8%B3%AA/>
(2021/8/28)

<https://lovegreen.net/languageofflower/p251526/>
銀木犀の花言葉
(2021/9/1)

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E6%81%B0%E3%82%82/>
あたかもの意味
(2021/9/1)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/cou/43/3/43_182/_pdf
思春期における友人関係の発達的变化の様相
(2021/9/1)

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_002.pdf
中学学習指導要領
(2021/9/1)

「こどものこころが見えてくる本 臨床心理士が提案するちょっと新しい教育心理学のかたち」
著者：仲 淳 2020年5月15日発行
発行所：(株)あいら出版
(pp,108-111)

https://robo-done.com/blog/2021/07/honbu_piaget/
ピアジェが提唱する4つの思考発達段階
(2021/9/1)

https://berd.benesse.jp/up_images/research/Survey-on-learning_ALL.pdf

ベネッセの学力調査
(2021/9/1)

<https://www.uicommons.co.jp/topics/a153>
GIGA スクール構想のメリットとデメリット
(2021/9/1)

編集後記

本ブックガイドは、日本文化学科における専門科目の基礎知識を身につけるための多くの良書を紹介しています。日本文化学科では、日本語学から日本語教育・日本文学・琉球文学・琉球語学・図書館情報学・中国語学・国語教育学・多文化間コミュニケーションまで、多様な学問分野を学べます。新入生の皆さんは、多様であるがゆえに迷ってしまうかもしれません。そのような時、ぜひ『にちぶん羅針盤』から心惹かれる一冊を探してみてください。ここで紹介されている各図書は、各分野での学びの発展に役立てることで選ばれたものです。きっと、皆さんのこれからの大学生活や学びに頼もしい「読書の友」となってくれることでしょう。

最近、とても気に入ったイラストがあります。本がひしめく書齋に、一人の男性が座っている後ろ姿が見えます。彼の正面には大きな鏡があり、その鏡の向こうには遠い海が映っています。イリヤ・ミルスタインという人の絵です。このイメージがとりわけ私の心に強く響いたのは、新型コロナウイルスによっていろいろと思う通りにはならない現実を生きているためでしょう。読書という行為は、現実のさまざまなしがらみから人を自由してくれます。それが選りすぐられた良書ならなおさらのことでしょう。ふと漠然とした焦りや不安を感じる時、キャンパス生活に寂しさを感じる時、講義で学んだことについてもっと深く知りたいと思う時、本は皆さんの手を待っています。

また、本ブックガイドには先生方のエッセイや、読書感想文などの学生作品も掲載されています。ぜひ日本文化学科に新しく赴任なさった名城邦孝先生や先生方の魅力的なエッセイを楽しんでください。巻末には、読書感想文や書評、レポートの調査方法などの学生作品が掲載されています。各ジャンルの書き方に参考にしてみてください。

(編集委員・安志那)

安志那／奥山貴之／兼本敏／我部大和／葛綿正一／下地賀代子／
田場裕規／桃原千英子／名城邦孝／西岡敏／村上陽子／山口真也

知をひらく新入生ブックガイド にちぶん羅針盤 (こんぱす)

2022年7月1日発行

編集・発行 沖縄国際大学総合文化学部 日本文化学科
〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾2-6-1
電話 098-892-1111
印刷 有限会社 金城印刷
〒901-0362 沖縄県糸満市真栄里908
電話 098-995-0001

